

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度	自	2018年10月1日
(第20期)	至	2019年9月30日

東亜バルブエンジニアリング株式会社

E01716

目次

頁

表紙	
第一部 企業情報	1
第1 企業の概況	1
1. 主要な経営指標等の推移	1
2. 沿革	3
3. 事業の内容	4
4. 関係会社の状況	6
5. 従業員の状況	6
第2 事業の状況	7
1. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	7
2. 事業等のリスク	9
3. 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	10
4. 経営上の重要な契約等	14
5. 研究開発活動	15
第3 設備の状況	16
1. 設備投資等の概要	16
2. 主要な設備の状況	16
3. 設備の新設、除却等の計画	16
第4 提出会社の状況	17
1. 株式等の状況	17
(1) 株式の総数等	17
(2) 新株予約権等の状況	17
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	17
(4) 発行済株式総数、資本金等の推移	17
(5) 所有者別状況	18
(6) 大株主の状況	18
(7) 議決権の状況	19
2. 自己株式の取得等の状況	20
(1) 株主総会決議による取得の状況	20
(2) 取締役会決議による取得の状況	20
(3) 株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容	20
(4) 取得自己株式の処理状況及び保有状況	20
3. 配当政策	20
4. コーポレート・ガバナンスの状況等	21
(1) コーポレート・ガバナンスの概要	21
(2) 役員の状況	26
(3) 監査の状況	30
(4) 役員の報酬等	32
(5) 株式の保有状況	33
第5 経理の状況	36
1. 連結財務諸表等	37
(1) 連結財務諸表	37
(2) その他	62
2. 財務諸表等	63
(1) 財務諸表	63
(2) 主な資産及び負債の内容	72
(3) その他	72
第6 提出会社の株式事務の概要	73
第7 提出会社の参考情報	74
1. 提出会社の親会社等の情報	74
2. その他の参考情報	74
第二部 提出会社の保証会社等の情報	75

[監査報告書]

[内部統制報告書]

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	2019年12月24日
【事業年度】	第20期（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）
【会社名】	東亜バルブエンジニアリング株式会社
【英訳名】	Toa Valve Engineering Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役 笹野 幸明
【本店の所在の場所】	兵庫県尼崎市西立花町五丁目12番1号
【電話番号】	06（6416）1184（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役 管理本部長 飯田 明彦
【最寄りの連絡場所】	兵庫県尼崎市西立花町五丁目12番1号
【電話番号】	06（6416）1184（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役 管理本部長 飯田 明彦
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

（注）当事業年度より、日付の表示を和暦から西暦に変更しております。

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次		第16期	第17期	第18期	第19期	第20期
決算年月		(2015年9月)	(2016年9月)	(2017年9月)	(2018年9月)	(2019年9月)
売上高	千円	9,183,377	8,520,743	8,102,822	8,105,228	8,239,059
経常利益	千円	808,081	295,686	287,078	581,335	576,849
親会社株主に帰属する当期純利益	千円	694,502	231,993	184,243	480,040	714,372
包括利益	千円	676,199	226,528	317,339	534,399	592,712
純資産額	千円	7,082,996	7,114,505	7,363,417	7,839,864	8,293,305
総資産額	千円	11,558,528	10,794,271	10,731,244	10,775,374	11,702,270
1株当たり純資産額	円	3,023.58	3,120.20	3,222.01	3,415.83	3,631.05
1株当たり当期純利益	円	297.50	99.60	81.25	211.24	313.27
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	円	—	—	—	—	—
自己資本比率	%	61.1	65.6	68.1	72.1	70.9
自己資本利益率	%	10.2	3.3	2.6	6.4	8.9
株価収益率	倍	5.0	10.6	15.5	6.0	3.8
営業活動によるキャッシュ・フロー	千円	1,366,298	3,219	1,355,619	△672,656	1,169,869
投資活動によるキャッシュ・フロー	千円	△180,992	△94,279	△278,727	△346,181	△560,173
財務活動によるキャッシュ・フロー	千円	△112,508	△886,057	△629,929	△372,391	16,781
現金及び現金同等物の期末残高	千円	4,636,235	3,652,677	4,109,411	2,717,959	3,330,102
従業員数 (外、平均臨時雇用者数)	名	352 (80)	338 (79)	324 (85)	320 (85)	314 (97)

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(2) 提出会社の経営指標等

回次		第16期	第17期	第18期	第19期	第20期
決算年月		(2015年9月)	(2016年9月)	(2017年9月)	(2018年9月)	(2019年9月)
売上高	千円	8,353,239	7,784,039	7,276,676	7,391,406	7,640,569
経常利益	千円	764,713	206,398	148,260	516,936	600,531
当期純利益	千円	652,519	174,394	87,858	444,418	741,906
資本金	千円	1,739,559	1,739,559	1,739,559	1,739,559	1,739,559
発行済株式総数	株	2,678,600	2,678,600	2,678,600	2,678,600	2,678,600
純資産額	千円	7,030,523	7,002,614	7,147,246	7,561,653	8,099,837
総資産額	千円	11,343,603	10,506,332	10,382,427	10,372,433	11,402,102
1株当たり純資産額	円	3,011.70	3,087.92	3,152.16	3,324.38	3,546.46
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額)	円	40 (-)	30 (15)	30 (15)	35 (15)	40 (15)
1株当たり当期純利益	円	279.52	74.87	38.75	195.57	325.35
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益	円	-	-	-	-	-
自己資本比率	%	62.0	66.7	68.8	72.9	71.0
自己資本利益率	%	9.6	2.5	1.2	6.0	9.5
株価収益率	倍	5.3	14.1	32.6	6.4	3.7
配当性向	%	14.3	40.1	77.4	17.9	12.3
従業員数 (外、平均臨時雇用者数)	名	322 (57)	307 (56)	306 (57)	302 (44)	301 (30)
株主総利回り (比較指標：配当込み TOPIX)	% %	112.7 (108.4)	82.8 (103.9)	100.2 (134.3)	102.6 (148.9)	100.7 (133.5)
最高株価	円	1,909	1,680	1,377	1,415	1,302
最低株価	円	1,149	971	1,049	1,241	1,026

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 最高株価及び最低株価は東京証券取引所（市場第二部）におけるものであります。

2 【沿革】

年月	沿革
1999年11月	東亜バルブ株式会社と東亜エンジニアリング株式会社は共同して株式移転により完全親会社を設立することを各社取締役会で決議し覚書を締結致しました。
1999年12月	東亜バルブ株式会社の第82回定時株主総会及び東亜エンジニアリング株式会社の第27回定時株主総会において、株式移転により完全親会社を設立することについて承認を得ました。
2000年3月	東亜バルブ株式会社と東亜エンジニアリング株式会社は共同して株式移転により純粋持株会社、株式会社トウアバルブグループ本社を設立致しました。
2002年10月	東京証券取引所市場第二部並びに大阪証券取引所市場第二部に上場致しました。 シンガポールに同国及び近隣諸国の火力発電所等のプラント及び同国に入港する船舶のバルブメンテナンス事業等を行う目的をもって、トウアバルブオーバーシーズPte. Ltd.（現連結子会社）を設立致しました。
2006年10月	株式会社高田製鋼所の全事業を吸収分割の方法により会社分割して東亜バルブ株式会社に承継致しました。
2007年8月	株式会社高田製鋼所を清算終了致しました。
2008年10月	東亜バルブ株式会社は東亜エンジニアリング株式会社を吸収合併し、商号を東亜バルブエンジニアリング株式会社と致しました。
2010年4月	当社は連結子会社であった東亜バルブエンジニアリング株式会社を吸収合併し、商号を株式会社トウアバルブグループ本社から東亜バルブエンジニアリング株式会社へと変更致しました。
2014年7月	福島県いわき市に当社と地元企業である株式会社クリエイトとの共同出資により、東亜クリエイト株式会社（現連結子会社）を設立致しました。
2016年2月	株式会社キッツと資本業務提携契約を締結致しました。

2019年10月 福井県大飯郡に当社とトウアサービス株式会社（現連結子会社）との共同出資により、TVEリファインメタル株式会社（現連結子会社）を設立致しました。

なお、従来まで上場しておりました東亜バルブ株式会社は、株式会社トウアバルブグループ本社の設立に伴い、2000年3月に上場廃止となりました。東亜バルブ株式会社の沿革は以下のとおりであります。

1940年4月	資本金1,000千円をもって、虫印バルブ製造株式会社を設立し、虫印バルブ製作所の事業一切を継承致しました。 同時に従来から製品販売、所要資材の購入等に関し特別の関係のあった旧三菱商事株式会社の資本参加をみました。
1942年9月	社名を東亜バルブ株式会社と改称致しました。
1953年10月	大阪地区店頭株式を公開致しました。
1961年10月	大阪証券取引所市場第二部に株式を上場致しました。
1971年4月	東京証券取引所市場第二部に株式を上場致しました。
1974年9月	当社納入バルブの定期検査及び修理工事業務を移管する目的をもって、東亜エンジニアリング株式会社を設立致しました。

3 【事業の内容】

当社グループは、当社及び連結子会社3社（国内2社、海外1社）、並びに当社と継続的で緊密な事実上の関係のある関連当事者1社で構成され、各種産業用バルブの開発、製造・販売、そのメンテナンス並びに除染・廃炉事業などを主な事業の内容としております。

当社グループの事業に係る位置付け及びセグメントとの関連は、次のとおりであります。

なお、次の3事業は「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

《バルブ事業》

原子力発電所、火力発電所など電力プラント用高温高圧バルブを中心に、船舶用、石油化学プラント用などの各種産業用バルブ等の製造販売及び分解・点検・修理などの保守作業を行っております。また、可搬式の特殊工作機械を使用することにより、敷設配管から取り外すことなく現地において修理・改造を行うことができる工法を開発し、施工しております。

<関係会社>

トウアサービス株式会社

トウアバルブオーバーシーズP t e . L t d . (海外)

<関連当事者>

株式会社キッツ

《製鋼事業》

鋳鋼製品の製造販売を行っております。

<関連当事者>

株式会社キッツ

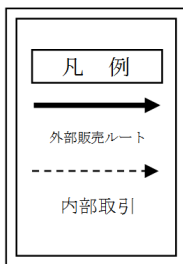
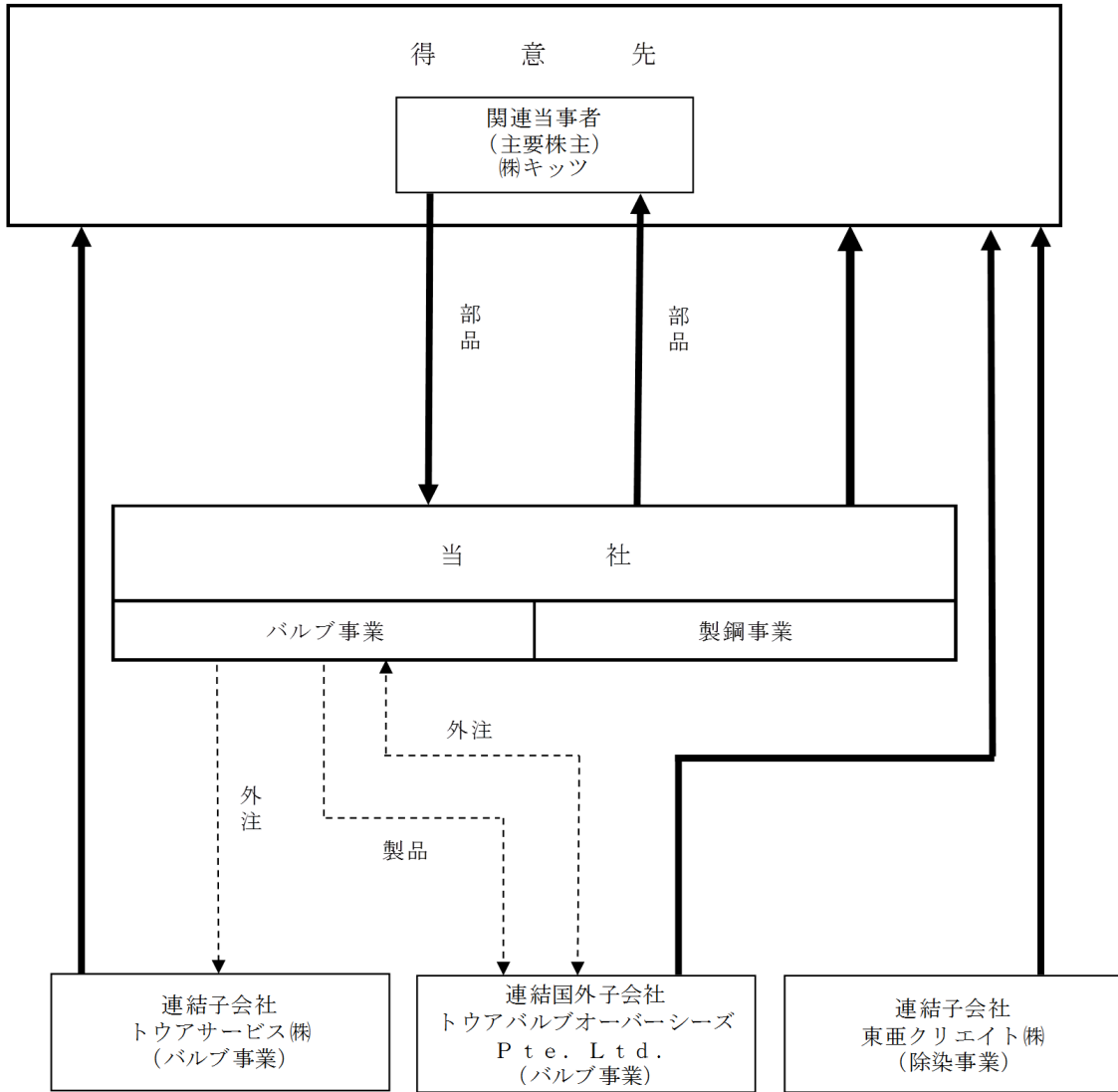
《除染事業》

福島県を活動拠点とした放射線除去業務を行っております。

<関係会社>

東亜クリエイト株式会社

事業の系統図は次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) トウアサービズ(株)	兵庫県尼崎市	64	バルブ	99.9 (0.7)	役員の兼務 有 資金の貸付 社員の受入
(連結子会社) 東亜クリエイト(株)	福島県いわき市	10	除染	99.8	役員の兼務 有 社員の出向
(連結国外子会社) トウアバルブオーバーク ーズP t e . L t d .	シンガポール サンビューロード	千シンガ ポールドル 1,815	バルブ	100.0	役員の兼務 有 資金の貸付 社員の出向

- (注) 1. 「主要な事業の内容」欄には、セグメントの名称を記載しております。
 2. 議決権所有割合の()内は、間接所有割合で内数であります。
 3. 有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はありません。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2019年9月30日現在

セグメントの名称	従業員数 (名)
バルブ事業	224 (66)
製鋼事業	54 (5)
除染事業	10 (26)
全社 (共通)	26 (—)
合計	314 (97)

- (注) 1. 従業員数は就業人員（当社グループからグループ外部への出向者を除き、グループ外部から当社グループへの出向者を含んでおります。）であり、嘱託及び臨時従業員数（契約社員、パートタイマーは含み、社外の人材会社からの派遣社員は除いております。）の平均雇用人員は、()内に年間の平均人員を外数で記載しております。
 2. 全社（共通）として記載している従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。
 3. 製鋼事業の従業員数は、三重県の伊賀工場に勤務する従業員の員数（管理部門を除く）を記載しております。

(2) 提出会社の状況

2019年9月30日現在

従業員数 (名)	平均年齢	平均勤続年数	平均年間給与 (円)
301 (30)	46才6ヶ月	20年4ヶ月	5,975,105

セグメントの名称	従業員数 (名)
バルブ事業	221 (25)
製鋼事業	54 (5)
除染事業	— (—)
全社 (共通)	26 (—)
合計	301 (30)

- (注) 1. 従業員数は就業人員（連結子会社から当社への出向者を含んでおります。）であり、嘱託及び臨時従業員数（契約社員、パートタイマーは含み、社外の人材会社からの派遣社員は除いております。）の平均雇用人員は、()内に年間の平均人員を外数で記載しております。
 2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。なお、当社への出向者については当社の負担額により算出しております。
 3. 満60才定年退職制度を採用しております。
 4. 全社（共通）として記載している従業員数は、特定のセグメントに区分できない管理部門に所属しているものであります。
 5. 製鋼事業の従業員数は、三重県の伊賀工場に勤務する従業員の員数（管理部門を除く）を記載しております。

(3) 労働組合の状況

当社グループにおいては、当社は労働組合を結成しており、現在JAMに加盟しております。連結子会社については労働組合を結成しておりません。
 なお、労使関係は相互理解を基調に円満な関係で推移しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

当社グループは、お客様のニーズに沿ったバルブの製造からメンテナンスまで、バルブのトータルライフにわたるさまざまなサービスをスピーディにご提供できる体制作りにも努力を続けております。お客様に安心してご使用いただける高品質・高性能なバルブ製品、バルブの予防保全に絶大な力を発揮する診断機器、豊富な知識・経験を持つ技術者によるメンテナンスサービスなどで、全国の原子力発電所（以下、「原発」）、火力発電所をはじめとする各種産業用プラントの安全で安定した運転のお手伝いを通じ、社会に貢献できる企業グループであり続けたいと考えております。当社グループでは、グループ会社共通の社是として、

- 一 信頼される企業として社会の進歩に貢献する
- 一 誠実と融和により健康で活気のある職場をつくる
- 一 経営の刷新と技術の開発につとめる

を掲げ、全役職員のベクトルを同じ方向に揃えグループ力の結集を図ることで、顧客満足度を高め、社会・地域の健全な発展に貢献し、従業員とその家族の生活を守り、株主への適正な利益分配を行い、安定的持続可能な強固で粘りのある企業体質の構築を目指しております。

また、当社グループの主な事業である、バルブ製品の製造、メンテナンスとも、高い技術を持つ地域の協力工場や、厳しい工期と過酷な環境下でのメンテナンス作業に従事される外注技術者など、数多くの関係取引先のご協力を頂戴することで成り立っており、常に感謝の心を忘れることなく、今後も関係取引先との相互発展を基本とした強い信頼・協力関係を構築してまいります。

(2) 目標とする経営指標

当社グループが製造いたしますバルブ製品、鋳鋼製品のほとんどは、お客様の個別仕様書によって受注・生産を行っており、汎用品はごく一部にすぎません。また、バルブメンテナンスサービスにつきましても、一般的な定期保守点検契約のようなものは存在せず、比較的安定的に売上が望まれる原子力発電所の定期検査工事を除いては、基本的にプラントの運転状況とそれに応じた当社の営業活動の成果によるものであります。

よって各年度の売上高は必ずしも安定したものではないため、損益も同様に年度毎の山谷が非常に激しくなる可能性があり、特にバルブ事業は、売上の増減に加えその時々々の工場操業度によっても損益に少なからず変動が発生し、目標とする経営指標として、例えば投下資本に対する利益率等を設定したとしても、以上のような理由から分子となる利益の変動が大きく、安定的且つ継続的な目標指標とすることは困難であると考えております。

このため、年度計画及び中期収益計画の策定に際しては、各年度に予想される市場環境から受注想定案件を積み上げることにより、売上高、営業利益、経常利益を予算化することとしております。

そして個々の案件の受注時には、厳密な貢献利益（限界利益）管理のもと、その時々々の工場操業度と平準化効果、社員・外注作業者の最適要員配置、後年度における期待収益性などを重要な要素として受注判断を行うことで利益管理を実施しており、これにより機会損失を最小化し、獲得利益の最大化を計っております。

(3) 会社の対処すべき課題

①基本課題

当社グループはこれまで国内原発の原型炉、実証炉、商用炉全てにバルブを納入してまいりました。原発黎明期においては重要な役割を担うバルブは海外製品が導入されてきましたが、現在ではPWRと呼ばれる加圧水型原子炉の重要なバルブ・安全弁は当社製品をご採用いただいております。

このように当社グループは日本の原発の発展とともに歩んでまいりました。よって原発関連事業者としての責任と使命は今後も何があっても果たしていくことを基本的な会社方針としております。

東日本大震災の津波による東京電力福島第一原発事故から8年が経過し、これまでに5原発9基で再稼働が実現いたしました。今後、これら原発の定期検査による収益が見込める状況ですが、それでも事故以前の水準には程遠く、より強い収益の柱を得ることが最重要課題であることには変わりはありません。

本年6月、原発関連企業として責任を全うし企業の継続性を維持するために何をすべきか、これらの基本課題と論点を改めて整理し新中期経営計画として策定・公表いたしました。

この新中期経営計画のテーマは「技術力と高品質で、一番必要とされるバルブメーカーに！」です。これを当社グループのチカラの源泉であるヒトと技術に焦点を当て、「人のチカラ」「つくるチカラ」「まもるチカラ」の結集で実現を目指してまいります。

まずは原発再稼働を追い風に、2022年3月に迎える創業100周年までに、従前のレベルまで業容を回復させることを目指します。そして新中期経営計画で目指す姿とした、『高品質弁と設備保全で、世界エネルギーインフラの安全安定運転に貢献するグローバルニッチトップへ！』に邁進してまいります。

②経営基盤の構造改革

(生産性の改善～TAMES-Project～)

創業100周年は次の100年に向けての通過点です。社会に求められつつ会社を長く継続するためには成長戦略とともに事業基盤の強化が不可欠です。これを具体化する施策として、全社的業務効率改善活動であるTAMES-Projectを開始いたしました。

受注生産型の当社グループの事業は効率化を生産量に求めることはできません。時間・規格・技術・場所等々、多くの制約の中で業務効率向上を実現していくことは決して簡単なことではありません。

この課題に全社的に取り組み、経営効率向上を目指すのが本プロジェクトの狙いです。コスト低減に留まらず、SDGsの諸課題、働き方改革、ICTの推進、従業員満足経営など、内外の課題を取り込みながら包括的に企業基盤の強化・改善を進めてまいります。

③既存3事業の深化

バルブ事業、メンテナンス事業、製鋼事業の既存3事業の個別課題を攻めの事業戦略により解決し更なる成長を目指します。

バルブ事業とメンテナンス事業は、当社グループが世界に誇る高温高圧弁・安全弁の技術とそれを象徴するTOAのブランドを活かし、グローバルニッチトップ化戦略の中核に位置付けられます。

国内原発、火力発電設備の安全・安定運転と経済性に貢献する新たな提案で顧客満足度を高め、原発廃止措置支援装置の開発、IT技術による状態監視装置やサービスシステムの構築、新たな製品・メンテナンス機器の開発などで成長を目指してまいります。また同時にコスト面での課題を克服すべくTAMES-Project活動での効率化実現に取り組んでまいります。

製鋼事業は製品の高付加価値化を主要施策として進めてまいります。加工、検査、材質、納期、そして何よりも品質を高めた高付加価値製品の提供により収益性の改善を推進してまいります。

④新領域への挑戦

(グローバルニッチトップへの挑戦)

既存事業の中核であるバルブ事業は、世間的には市場飽和状態にあって決して魅力的なものとは映らないでしょう。だからこそ当社はグローバルニッチトップを目指す選択になりますが、その中でも新たな事業領域の開発は不可欠な戦略です。

当社グループはプラントメーカーの建設する電力プラントを通じ、世界中、特に東南アジア圏に非常に多くのバルブを納入し高い評価を得てまいりました。この商品力とブランド力を活かしながら、資本業務提携を行っている株式会社キッツとの連携によりグローバル展開を目指してまいります。

発電所では非常に多くのバルブが使用されていますが、高温高圧弁・安全弁は数多くあるバルブのごく一部に過ぎません。しかし調達価格で見たときその割合は決して低くはありません。このことは逆に受注競争の結果をゼロ・サムに導く厳しい世界ではありますが、さらにニッチな分野での商品性やサービス力を徹底的に高めることで、ニッチな市場での競争優位を確立してまいります。

(廃炉事業)

長期的な事業拡大戦略の一翼を担うのが廃炉事業への進出と考えております。これはバルブ事業の集大成ともいえる事業で、バルブのトータルライフに亘りワン・ストップでサービスを提供するという、当社グループの目指す姿に通ずるものです。

具体的な事業のイメージは、廃止された発電所から回収したバルブをリサイクルして新しいバルブ等にして新しい発電所に戻すという非常にシンプルなものですが、そこに至る道程は困難の連続と想定しております。また、実際に原発からリサイクル対象の金属が排出されるのは数年先のことですが、早期の参入表明で先駆者としての優位性を築き、今後の事業本格化に備えてまいります。

(デジタル技術の活用)

ビッグデータやセンシング技術などが事業に取り込まれ、多方面で新たなマーケットの創出、ビジネスモデルの開発につながっています。さらにはコンピューターを離れ、何かをインターネットにつなぐことで新たなビジネスを広げるIoT技術も話題になってきました。

当社グループにおいても、長年の経験や知見、そして電力用バルブメーカーとしてのブランド力や市場シェアを活かし、「情報」や「ノウハウ」を商品とした事業展開の可能性についてさらに深く掘り下げる必要があると考えております。

その具体策として当連結会計年度よりデジタルマーケティングを開始いたしました。今後はこれをひとつの足掛かりに新たなバルブソリューションを展開してまいります。

2【事業等のリスク】

当社グループの財政状態、経営成績に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には以下のようなものがあります。なお、文中における将来に関する事項は、当連結会計年度末において判断したものであります。

(1) 事業環境の変化による影響

当社グループのバルブ事業の売上は、原子力・火力発電所に代表される国内電力マーケット向けが重要な割合を占めています。

今後も電力市場に強く依存した事業運営は不可避であり、よって、どのような要因であれ、電力事業環境に大きな変化が生じることで、当社業績に大きな影響を及ぼす可能性が常にあるといえます。

その要因は、発電所事故のみならず、技術革新や電力自由化などによる発電事業形態そのものの変化、発電事業にIT等のデジタル技術や先進技術が導入された際の当社グループの対応遅れ、地球温暖化問題に由来する従来型発電市場の縮小、例えば、独・シーメンス社が原発事業から撤退したことに象徴されるような、当社グループ主要取引先の大きな方針転換といったサプライチェーンの劇的な変化、こういったものもリスク顕在化の要因になり得るものと考えております。

(2) 大規模自然災害や事故などによる生産設備等への影響

当社グループの製造拠点は、バルブの製造は兵庫県尼崎市の本社工場、バルブ用主要素材である鋳鋼部品の製造は三重県伊賀市の伊賀工場、以上の国内2か所となっております。

これら生産拠点において地震、台風、洪水、高潮、突風などの自然現象による被害、特に老朽化の進む本社工場については、南海トラフ大地震の被災想定範囲に含まれることも相俟って、これら自然災害の被害に対し危機感を強めているところです。

上述の国内製造2拠点は、一方の緊急時に他方が機能・役割を代替する関係にはなく、火災や天災及び不可抗力の事象により操業停止に至るような事態となった場合には機会損失の発生や納期遅延など当社グループの業績に重大な影響をもたらす可能性があります。

(3) 製品、メンテナンス上の瑕疵などに起因する事故等の品質保証問題発生による影響

当社グループの製品は、原子力発電所をはじめとした、各種産業用プラントの重要部位で採用されているため、その製品の製造上の欠陥及び当社グループが行ったメンテナンスの不具合等により、動作不良等が生じ本来の機能を果たせない場合、重大な事故につながる可能性があります。

そのような事故が発生した場合、当社グループの業績に重大な影響を及ぼす可能性があります。

(4) コンピューター設備の停止による影響

当社は完全受注生産型のビジネスを行っていることから、基幹業務はオリジナルの情報処理システムを採用しており、何等かの事象によりこれら基幹システムが停止した場合、生産活動に重大な影響を与えることが懸念されますが、当社グループのシステムは被災した際にも迅速な復旧を可能な体制としております。また、業務系の共用データストレージは、高度な耐震構造と特殊消火装置を設置するなどしたマシンルームに設置することで、万一の際の被害を最少化できるよう備えております。

しかし、なんらかの要因による通信回線の遮断、システムのバグ、ウィルス感染などによりシステムが停止する可能性を完全に排除できるわけではなく、こういった有事に際しシステム復旧が遅れるような状態となった場合には当社グループの業績に重大な影響を与える可能性があります。

(5) 法的規制、各種規格・許認可等を維持できない場合の影響

当社グループの一部事業は、建設業法に基づく一般建設業、特定建設業の許可を得ております。そしてこの許可を維持するには人的要件を常に充足しておく必要があります。今後、何等かの事由により、その要件を充足できなくなった場合には当社グループの業績に影響を与える可能性があります。

また、当社グループは、原子力・火力発電所等を納入先とすることから、数多くの規制・規格・許認可に適合した製品が常に求められております。これらは新規規定および改定・変更も適宜行われます。

しかし能力的制約や人的制約等から、これらに適切に対応することができない場合には、当社グループの業績に重大な影響を及ぼす可能性があります。

(6) IT化対応の遅れによる影響

当社グループにおいては、未だ労働集約的なものづくりが主流であり、製造現場にデジタル技術の導入が十分に進んでいるとは言えない状況です。

これは、当社グループを取り巻く厳しい事業環境下で、先進投資に対する取組不足が大きく影響しているとの認識です。

現在は経営効率と労働生産性の改善を目指し、デジタル技術活用を積極的に進めるためのPJを推進中ですが、実現手段のひとつであるデジタル技術活用に遅れが生じることで受注機会の喪失により業績に影響を及ぼす可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

① 財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度（2018年10月1日から2019年9月30日まで）におけるわが国経済は、依然、中国経済の先行き、海外経済の動向と政策に関する不確実性に留意しつつも、好調な企業業績や雇用・所得環境の改善傾向を背景に、緩やかな回復基調の中で推移いたしました。しかし、米国と中国の貿易戦争や、相次ぐ国内自然災害が経済に与える影響を憂慮する状況が続いております。

当社グループは、原子力・火力発電所用バルブの製造とメンテナンスを主な事業としております。東日本大震災の津波による東京電力福島第一原子力発電所事故以降、原子力発電所（以下、「原発」）を取り巻く環境が大きく変化し大幅な減収を余儀なくされ、震災以前の売上高100億円回復を目指し尽力しておりますが、既に8事業年度を経過するも依然厳しい状況で今日に至っております。

また今春、原発へのテロ対策として実施される特定重大事故等対処施設（特重施設）の工事遅れにより、再稼働を果たした原発においても今後、一定期間運転を停止することもあり得ることが明らかになり、当社グループの今後の業績に対する影響を現在評価しているところです。

このような中、当連結会計年度には、関西電力高浜原発3号機、関西電力大飯原発3号機、九州電力玄海原発3号機で定期検査を完了し売上が計上したほか、原発向け再稼働準備や安全対策でバルブ製品の売上が大幅に増え、原発関係の収益が前連結会計年度に比して増加しました。しかし火力発電所向けは、製品、サービスとも前連結会計年度に比して減少し、バルブ事業全体としてはほぼ前連結会計年度並みの売上高となりました。

バルブ事業以外の事業では、製鋼事業は主要顧客が国内調達へ転換した影響で売上は増加しましたが、除染事業は大型工事がほぼ一巡した状況から前連結会計年度を下回る売上高となりました。

これらの結果、当連結会計年度の売上高は82億39百万円（前年同期比1.7%増）で前連結会計年度に比して若干の増収となり、報告セグメント別の売上高ではバルブ事業が67億2百万円（同0.3%増）、製鋼事業が10億52百万円（同23.1%増）、除染事業が4億91百万円（同14.7%減）となりました。

表：報告セグメント内の種類別売上高

報告セグメント	種類別の売上高	前連結会計年度 (百万円)	当連結会計年度 (百万円)	前年同期比 (%)
バルブ事業	バルブ（新製弁）	2,560	2,907	13.6
	バルブ用取替補修部品	855	1,020	19.4
	原子力発電所定期検査工事	1,332	894	△32.9
	その他メンテナンス等の役務提供	1,933	1,879	△2.8
	小計	6,681	6,702	0.3
製鋼事業	鋳鋼製品	854	1,052	23.1
除染事業	地域除染等	575	491	△14.7
消去又は全社		△7	△7	—
	合計	8,105	8,239	1.7

採算面においては、当連結会計年度の売上高は前連結会計年度に対し微増ながら、バルブ事業で採算の良い原子力向けが堅調であったことから変動比率が低下し基礎的収益力は改善いたしました。

赤字案件の受注に伴い計上される受注損失引当金の残高は、前連結会計年度末から1億30百万円増加し採算を圧迫いたしました。しかし翌連結会計年度の第1四半期連結会計期間に納期の到来する案件が一定程度あったため、特に第4四半期連結会計期間の稼働率が高レベルに推移し、たな卸資産が大幅に増加し受注損失引当金の影響を一部減殺した結果、営業利益5億20百万円（前年同期比4.4%減）、経常利益5億76百万円（同0.8%減）と前連結会計年度に比して微減に留めることができました。

報告セグメント別の損益では、採算性の改善したバルブ事業は15億40百万円（前年同期比15.4%増）、製鋼事業は材料高など変動費の増加で増収効果を活かせず2億12百万円の赤字（前年同期は2億9百万円の赤字）、除染事業は案件の小口化と案件内容の変化により固定費が増加し49百万円の赤字（同43百万円の黒字）となりました。

また、当連結会計年度の親会社株主に帰属する当期純利益は7億14百万円（前年同期比48.8%増）となりました。当社グループはこれまで、東日本大震災以降の業績不安定化に伴い、繰延税金資産の全額に対し評価性引当額を引き当て、資産として計上しないこととしてまいりました。しかしようやく翌連結会計年度以降の課税所得の計上について一定の確実性を認めることができる状況となったため、当連結会計年度より繰延税金資産の一部である2億55百万円を計上したことから、当該利益の増加となったものです。

業績面以外では、2022年の創業100周年に向け、中期経営計画を全面改定いたしました。今回の「中期経営計画2019・創業100周年を超え「目指す将来像」の実現に向けて」では、目指す将来像を、『高品質弁と設備保全で、世界エネルギーインフラの安全安定運転に貢献するグローバルニッチトップへ！』に据え「人のチカラ」「つくるチカラ」「まもるチカラ」の結集で、技術力と高品質で一番必要とされるバルブメーカーを目指してまいります。

また、最大且つ積年の課題である原価低減のため、TAMES (ToA Management Evolving System) Projectを当連結会計年度より開始いたしました。このプロジェクトは、全社的経営効率向上のため全ての事業活動における生産性向上を目指し組織横断的に行われる活動で、マーケットイン発想への転換により、「納期」「コスト」「品質・サービス」で顧客に貢献できる企業へと変貌を目指すものです。名称のTAMES (タメス) には、「試す (Try)、Challenge」の意味を重ね合わせ、当社グループで働く全ての従業員が、「まずはやってみる」の精神で取り組むことにより、新しい視点・発想から経営効率の向上を実現し、会社業績の改善につなげていく目論見です。

このほか、B to B型事業の既存概念を打破し、これまでのプル型からプッシュ型への顧客アプローチ転換を目指し、メールマガジンの発信を新たに開始しました。そしてその際の訴求情報として、当社ホームページに『バルブソリューション』、『鑄鋼技術ラボ』、『TEST LABO』を同時に開設いたしました。これらをさらにアピールすべく本年10月に大阪で開催された機械要素技術展へ出展いたしました。今後は東京で開催のこれらイベントへの出展を積極的に展開し、今後ますます攻めの営業へと転換を図ってまいります。

② キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物の期末残高は33億30百万円となり、前連結会計年度末に比して6億12百万円増加しました。

この内訳は次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

減価償却を2億92百万円実施した上で税金等調整前当期純利益を5億73百万円計上したところに、たな卸資産の増加が5億44百万円あったものの、売上債権の減少が7億23百万円、仕入債務の増加が2億27百万円などキャッシュ・インの要因が上回ったことから、11億69百万円のキャッシュ・イン（前年同期は6億72百万円のキャッシュ・アウト）となりました。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資有価証券、有形固定資産の取得を中心に5億60百万円のキャッシュ・アウト（前年同期は3億46百万円のキャッシュ・アウト）となりました。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

長期借入金の純増額1億85百万円、および前連結会計年度に係る期末配当、当連結会計年度の中間配当の実施などにより16百万円のキャッシュ・イン（前年同期は3億72百万円のキャッシュ・アウト）となりました。

③ 生産、受注及び販売の実績

(1) 生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	前年同期比 (%)
バルブ事業 (千円)	2,497,540	4.6
製鋼事業 (千円)	1,263,212	38.5
合計 (千円)	3,760,752	14.0

(注) 1. 金額は製造原価によっております。

2. 金額には消費税等は含まれておりません。

3. バルブ事業のメンテナンス等及び除染事業については、事業の性格上生産実績の概念は馴染みませんので金額及び前年同期比を記載しておりません。

(2) 受注実績

当連結会計年度における受注実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高 (千円)	前年同期比 (%)	受注残高 (千円)	前年同期比 (%)
バルブ事業	8,207,210	10.9	5,746,987	35.7
製鋼事業	1,091,242	3.6	527,539	7.9
除染事業	510,731	△5.1	98,082	24.3
合計	9,809,183	9.1	6,372,610	32.7

(注) 1. 金額は販売価格によっております。

2. 金額には消費税等は含まれておりません。

(3) 販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	前年同期比 (%)
バルブ事業 (千円)	6,702,115	0.3
製鋼事業 (千円)	1,052,679	23.1
除染事業 (千円)	491,574	△14.7
消去又は全社 (千円)	△7,310	—
合計 (千円)	8,239,059	1.7

(注) 1. 金額には消費税等は含まれておりません。

2. 主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は、次のとおりであります。

相手先別	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)		当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	
	金額 (千円)	割合 (%)	金額 (千円)	割合 (%)
三菱商事パワーシステムズ株式会社	1,563,370	19.3	2,774,909	33.7
三菱商事株式会社	1,847,257	22.8	1,177,111	14.3
西華産業株式会社	1,201,983	14.8	781,895	9.5

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

① 財政状態の分析

(資産の部)

当連結会計年度末における総資産は117億2百万円となり、前連結会計年度末に比べ9億26百万円増加（前年同期比8.6%増）いたしました。

うち流動資産では、受取手形及び売掛金が6億52百万円減少となりましたが、一方で現金及び預金が6億12百万円、仕掛品が4億82百万円それぞれ増加したこと等により、前連結会計年度末に比べ4億49百万円増加（前年同期比5.4%増）となりました。

また、固定資産では投資有価証券が1億65百万円、繰延税金資産が2億53百万円それぞれ増加したこと等により、前連結会計年度末に比べ4億77百万円増加（前年同期比20.0%増）の28億61百万円となりました。

(負債の部)

当連結会計年度末の負債合計は34億8百万円となり、前連結会計年度末に比べ4億73百万円増加（前年同期比16.1%増）いたしました。

うち流動負債では、主に支払手形及び買掛金が2億9百万円、受注損失引当金が1億30百万円それぞれ増加したこと等により、前連結会計年度末に比べ4億41百万円増加（前年同期比23.1%増）となりました。

また、固定負債では繰延税金負債が1億34百万円減少しましたが、長期借入金、リース債務の増加もあり、前連結会計年度末に比べ32百万円増加（前年同期比3.2%増）となりました。

(純資産の部)

当連結会計年度末の純資産は82億93百万円となり、前連結会計年度末と比べ4億53百万円増加（前年同期比5.8%増）いたしました。

これは主にその他有価証券評価差額金が1億34百万円減少しましたが、利益剰余金が6億34百万円増加したこと等によるものであります。

② 経営成績の分析

(売上高)

当連結会計年度の売上高は82億39百万円となり、前連結会計年度と比べ1億33百万円増加（前年同期比1.7%増）いたしました。

当連結会計年度では、バルブ事業の原子力発電所定期検査工事が4億37百万円、その他メンテナンス等の役務提供で54百万円の減少と除染事業も84百万円減少となりましたが、一方で、バルブ（新製弁）が3億47百万円、バルブ用取替補修部品が1億65百万円それぞれ増加し、また、製鋼事業の鋳鋼製品も1億97百万円増加したことで、前連結会計年度の売上高を上回ることができました。

(営業利益)

当連結会計年度の営業利益は5億20百万円となり、前連結会計年度と比べ23百万円減少（前年同期比4.4%減）いたしました。

当連結会計年度では、バルブ事業での受注損失引当金の増加もありましたが、翌連結会計年度の第1四半期連結会計期間納期案件の対応等により当連結会計年度の第4四半期連結会計期間での稼働率が高く仕掛品が大幅に増加したこと等から前連結会計年度並みの営業利益を確保することができました。

(親会社株主に帰属する当期純利益)

当連結会計年度の親会社株主に帰属する当期純利益は、上記の営業利益に営業外損益の純額56百万円を加算し、これに特別損益の純額3百万円を減算し、次に法人税、住民税及び事業税と法人税等調整額及び非支配株主に帰属する当期純損失を加減算した結果、7億14百万円（前年同期比48.8%増）となりました。

③ 資本の財源及び資金の流動性についての分析

当社グループの資本の財源は、自己資金及び金融機関からの借入によっており、金融機関からの借入金については適宜に長期・短期の借入金により資金調達を行うほか、取引金融機関と特定融資枠契約、コミットメントライン契約を締結することで必要な財源の確保を図っております。

資金の流動性は、営業活動によるキャッシュ・フローを確実に獲得することを基本に、適正な投資活動と財務活動を組み合わせることで十分な流動性の確保と財務体質の健全性を維持するよう努めております。

当社グループの事業は主に完全受注生産型であることから、売上時期の偏重や製品の仕掛期間長期化による影響が、営業活動によるキャッシュ・フローの変動につながりがちであることから、これら事象について、キャッシュ・フローへの影響を十分に考慮した業務運営を社内に指示・徹底しております。

またこれら事象へ対応する目的も含め、取引金融機関とコミットメントライン契約を締結し、機動的な資金調達体制を維持するとともに、運転資金の効率的な運用を図っております。

4【経営上の重要な契約等】

(1) 業務提携受入契約

契約会社名	相手先	国名	契約品目	契約内容	契約期間
東亜バルブエンジニアリング(株)	アルカ・レーグラー社	ドイツ	コントロール弁	日本国内における販売・メンテナンス権の許諾、共同開発の締結	2019年9月1日から 2020年8月31日まで
東亜バルブエンジニアリング(株)	(有)テクノプランツ	日本	液体圧装置	日本国内における製造・販売に関する特許実施権の許諾	2011年2月25日から特許の存続期間まで

(2) 業務提携援助契約

相手方の名称	国名	契約品目	契約締結日	契約内容	契約期間
HEハルビン・パワー・プラント・バルブ社	中国	抽気逆止弁 鍛造玉型弁	2010年7月28日	技術的知識、情報及びノウハウの提供	2010年7月28日から22年間若しくは「製品」の製造開始年月日から20年間のどちらか早く到達した日まで
HEハルビン・パワー・プラント・バルブ社	中国	湿分分離加熱器 逃し弁	2013年4月18日	技術的知識、情報及びノウハウの提供	2013年4月18日から23年間若しくは「製品」の製造開始年月日から20年間のどちらか早く到達した日まで
HEハルビン・パワー・プラント・バルブ社	中国	原子力発電所用 抽気逆止弁	2013年4月18日	技術的知識、情報及びノウハウの提供	2013年4月18日から22年間若しくは「製品」の製造開始年月日から20年間のどちらか早く到達した日まで

(3) 資本業務提携契約

契約会社名	契約締結日	契約内容
株式会社キッツ	2016年2月12日	<p>①調達協力：相互の国内外調達先を活用し、材料の調達に協力する。</p> <p>②技術協力：相互に技術情報を提供し、必要に応じて共同開発をする。</p> <p>③生産協力：相互の販売品、もしくは共同開発品を、相互の生産拠点を活用し、最適な生産手段を構築する。</p> <p>④販売協力：「石油及びガス分野」並びに「電力分野」において、相互の製品、もしくは共同開発品を、最適な手段により販売する。</p> <p>⑤サービス協力：相互のメンテナンス機能を活用し、最適なサービス体制を構築する。</p>

(4) コミットメントライン契約

契約会社名	契約締結日	契約内容
株式会社三菱UFJ銀行	2018年3月30日	総額5億円のコミットメントライン契約による借入枠の設定

5 【研究開発活動】

当社グループの研究開発活動は、顧客との対面活動を含め多角的視野を持ち深層追究する事で、当社グループの目指すバルブ総合エンジニアリングサービスの高度化に繋げていくことを目標としております。各部門間の情報連携を高め、相乗効果を発揮させると同時に、顧客ニーズの発掘と把握に努め、継続的に顧客ニーズの抽出と新商品アイデアに対する可能性評価を目的とし研究開発活動を進めております。

開発時に生じる問題点を研究開発者の相互啓発により解決すると同時に、そのプロセスから派生した技術を生かし、新たな研究開発テーマが生まれるという好循環による発展を目指しております。

当社グループの研究開発体制は、大きくは二つに分かれ、各部門で日常的に発生する固有の問題点、例えば、生産効率の改善、新しいメンテナンス方法の開発等はそれぞれの部門主体で実施し、課題や研究資源が新商品や新事業に対し直接繋がる様な活動については技術部が主体となって実施しております。

なお、これらの成果は、技術部門で一元管理され、必要に応じ関連各部門にフィードバックし、研究開発の効率が低下しないようフォローできる体制としております。

更に、研究開発が大きく現実の課題と乖離することがない様に或いは喫緊の課題に適切な優先順位をつけてタイムリーに確実に対応していくため、経営と研究開発活動の連携を常に意識し、経営から出された課題・問題点を迅速且つ確実に解決・具体化出来る様に選択と集中による資源の有効活用を意識しながら取り組んでおります。

以上の結果、当連結会計年度における研究開発費の総額は、143,250千円となっております。

各セグメントにおける主な研究開発の内容は、次のとおりであります。

(バルブ事業)

1. 株式会社キッツとのコラボレーションによるコストダウン弁の開発
2. 弁座交換装置の開発（弁座切削装置、溶接装置）
3. 電動弁駆動装置のトルクスイッチ角モニタ装置の開発
4. 安全弁作動試験用油圧ジャッキ（他社製）生産中止に伴う代替装置の開発
5. 配管内面プラズマ切断装置の開発
6. 発電所内での安全弁デジタルN2試験装置の開発

これらバルブ事業に係る研究開発費は、143,250千円であります。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度において実施した設備投資の総額は214,755千円であります。セグメントごとの内訳はバルブ事業ではNC正面旋盤の取得、また、バルブ事業・製鋼事業共通として、Windows10PC入替、顔認証システムの導入などを実施しております。

なお、当連結会計年度において重要な設備の除却、売却等はありません。

2【主要な設備の状況】

(1) 提出会社

2019年9月30日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額(単位:千円)					従業員数 (名)	
			建物及 び構築 物	機械装 置及び 運搬具	土地 (面積㎡)	リース 資産	その他		合計
本社、工場及び倉庫 (兵庫県尼崎市)	バルブ	生産設備、 メンテナンス 管理施設等	423,918	304,332	62,871 (28,132.3)	104,609	24,581	920,313	184
製鋼製造部 (三重県伊賀市)	バルブ 製鋼	生産設備等	53,303	121,856	198,491 (24,808.2)	13,800	20,776	408,228	54
玄海出張所等 (佐賀県東松浦郡玄海町 他)	バルブ	メンテナンス 事務所及び 倉庫等	2,747	31,732	— (697.8)	24,013	2,774	61,267	35

(注) 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品の合計額であります。なお、金額には消費税等を含んでおりません。

(2) 国内子会社

主要なものはないため、記載を省略しております。

(3) 在外子会社

主要なものはないため、記載を省略しております。

3【設備の新設、除却等の計画】

当社グループの設備投資については、景気予測、業界動向、投資効率等を総合的に勘案して、設備計画を連結会社各社が個別に策定し、重要な計画等に際しては、当社が中心となりグループとしての最適化等を中心に調整を図っております。なお、当連結会計年度末における重要な設備の新設、改修計画及び除却等の計画はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数 (株)
普通株式	10,040,000
計	10,040,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2019年9月30日)	提出日現在発行数 (株) (2019年12月24日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	2,678,600	2,678,600	東京証券取引所 市場第二部	完全議決権株式であり、権利 内容に何ら限定のない当社にお ける標準となる株式であり、単 元株式数は100株であります。
計	2,678,600	2,678,600	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高 (株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金増 減額 (千円)	資本準備金残 高 (千円)
2009年1月4日 (注)	2,651,814	2,678,600	—	1,739,559	—	772,059

(注) 株式分割 (1 : 100) によるものであります。

(5) 【所有者別状況】

2019年9月30日現在

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）								単元未満株式の状況（株）
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数（人）	—	4	13	29	40	2	1,297	1,385	—
所有株式数（単元）	—	1,938	279	6,753	4,394	2	13,365	26,731	5,500
所有株式数の割合（%）	—	7.25	1.04	25.26	16.44	0.01	50.00	100.00	—

（注）自己株式394,677株は「個人その他」の欄に3,946単元、「単元未満株式の状況」の欄に77株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2019年9月30日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数（株）	発行済株式（自己株式を除く。）の総数に対する所有株式数の割合（%）
株式会社キッツ	千葉県美浜区中瀬一丁目10-1	302,200	13.23
西華産業株式会社	東京都千代田区丸の内三丁目3-1	203,200	8.90
INTERACTIVE BROKERS LLC （常任代理人 インタラクティブ・ブローカーズ証券株式会社）	ONE PICKWICK PLAZA GREENWICH, CONNECTICUT 06830 USA （東京都中央区日本橋茅場町三丁目2-10）	109,042	4.77
TOA取引先持株会	兵庫県尼崎市西立花町五丁目12-1	96,200	4.21
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社（信託口）	東京都中央区晴海一丁目8-11	81,100	3.55
株式会社光通信	東京都豊島区西池袋一丁目4-10	78,100	3.42
NPBN-SHOKORO LIMITED （常任代理人 野村証券株式会社）	1 ANGEL LANE, LONDON, EC4R 3AB, UNITED KINGDOM （東京都中央区日本橋一丁目9-1）	76,200	3.34
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7-1	68,000	2.98
前島 崇志	千葉県市川市	59,000	2.58
トウアバルブグループ従業員持株会	兵庫県尼崎市西立花町五丁目12-1	42,842	1.88
計	—	1,115,884	48.86

（注）1. 日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社（信託口）の所有株式数のうち、信託業務に係る株式数は、81,100株であります。

2. 2019年11月28日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書において、株式会社光通信が2019年11月21日現在で以下の株式を所有している旨が記載されておりますが、当社として2019年9月30日現在における実質所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況に含めておりません。

なお、その大量保有報告書の内容は次のとおりであります。

大量保有者	株式会社光通信
住所	東京都豊島区西池袋一丁目4-10
保有株券等の数	株式 135,700株
株券等保有割合	5.07%

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2019年9月30日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 394,600	—	権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であります。
完全議決権株式 (その他)	普通株式 2,278,500	22,785	同上
単元未満株式	普通株式 5,500	—	—
発行済株式総数	2,678,600	—	—
総株主の議決権	—	22,785	—

② 【自己株式等】

2019年9月30日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数 (株)	他人名義所有株式数 (株)	所有株式数の合計 (株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合 (%)
(自己保有株式) 東亜バルブエンジニアリング株式会社	兵庫県尼崎市西立花町 五丁目12-1	394,600	—	394,600	14.73
計	—	394,600	—	394,600	14.73

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	209	246,359
当期間における取得自己株式	—	—

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年12月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式数は含めておりません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他(譲渡制限付株式報酬による自己株式の処分)	9,526	15,822,686	—	—
保有自己株式数	394,677	—	394,677	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、2019年12月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取及び売渡による株式数は含めておりません。

3【配当政策】

当社の利益配分は、当社グループの資源を最大限に活用し、高効率の経営により、最大限の利益を生み出し、安定した配当を実施することを基本方針としており、株主様に長期・安定的に株式を保有いただけるような配当政策を実施してまいりたいと考えております。また、内部留保資金につきましては、今後の事業展開や企業体質の強化を図るため、有効に活用してまいります。

当社の剰余金の配当は、中間配当及び期末配当の年2回行うことを基本的な方針としております。

中間配当につきましては、「取締役会の決議により、毎年3月31日を基準日として、中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めております。

当期の連結業績は、前期に比して売上高は微増、経常利益は微減となりましたが、親会社株主に帰属する当期純利益は、繰延税金資産の計上を当期より再開した結果、前期に比して48.8%の増加となりました。東日本大震災による業績不安定化の影響で繰延税金資産を計上していなかったため、当期は計上額がそのまま親会社株主に帰属する当期純利益の増加に繋がった形です。

つきましては、配当方針に基づき、これら状況・背景を勘案し検討した結果、当期末の普通配当は1株当たり25円とさせていただきます。中間配当15円を本年6月に実施いたしましたので、年間配当金は1株当たり40円となります。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額(千円)	1株当たり配当額(円)
2019年5月10日 取締役会決議	34,259	15
2019年12月24日 定時株主総会決議	57,098	25

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、有効且つ適正な内部統制システムの運営により、企業を取り巻くリスクを適切にコントロールすることで業務効率を最大化すると共に損失の発生を防止若しくは最少限に留め、同時に、役職員のコンプライアンス意識を高め、透明性・公正性の高い健全な企業であるよう適時に情報開示を実施し、意思決定の迅速化による経営の効率化によって企業価値を高めていくことを基本方針としております。

② 企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社は、経営監視機能の客観性及び中立性を確保する経営管理体制を整え、経営の透明性及び健全性の強化に努めてまいりましたが、2016年12月に、取締役会の監督機能のより一層の強化とコーポレート・ガバナンスのさらなる向上を図るため、監査等委員会設置会社に移行しました。

監査等委員会は、取締役の職務執行に係る監査を行うとともに、各監査等委員が取締役会の決議において議決権を行使することで、経営に対するモニタリング機能を強化し、監査・監督の実効性を向上させております。また、取締役会での重要な業務執行の決定権限を執行役員で構成する経営会議に委任することで、取締役会の適切な監督のもと経営の意思決定および執行のさらなる迅速化を図っております。

当社は機関設計に、社外取締役2名を含む3名からなる監査等委員会を設置しておりますが、指名委員会等設置会社における、指名委員会、報酬委員会のもつ機能を有する任意機関は現時点では設置しておりません。これは今後の課題として認識しております。

これにより当社の経営監視体制は、取締役会による取締役の職務執行の監督、監査等委員会による監査、会計監査人による会計監査、内部監査室による内部統制監査を以て構築しております。

また当社は、重要な意思決定を行うための機関として、取締役会、経営会議を設置しております。

当社の各機関の概要は、以下のとおりです。

a. 取締役会

取締役会は、取締役（監査等委員である取締役を除く。）6名及び監査等委員である取締役3名の計9名で構成され、経営上の重要事項に関する意思決定と取締役の職務執行の監査・監督を行っており、取締役会の監督機能の強化と、経営に関し外部的視点からの助言を得るため、取締役（監査等委員である取締役を除く。）のうち1名が社外取締役であります。

取締役会は毎月1回の月例開催日を設定しており、必要に応じ臨時取締役会を開催し、法令、定款及び取締役会規則に定める事項について審議いたします。

b. 経営会議

経営会議は、執行役員（取締役を兼務するものを含む）8名で構成されております。

取締役会の員数を最小化するとともに社外取締役の比率を増大することで公正性、迅速性、透明性を維持すると同時に、効率的な経営を実現するため執行役員制度を採用しております。

経営会議は、原則月2回開催し、必要に応じて臨時に開催し、経営会議規程に基づく事項の審議、年度目標の進捗状況を報告・管理するほか、取締役会に付議すべき議題について事前に議論を行い、経営の円滑な遂行を図っております。

c. 監査等委員会

監査等委員会は原則月1回開催し、必要に応じて臨時に開催いたします。

監査等委員は、社外取締役2名を含む3名で構成され、取締役会を始めとする重要会議へ出席し、経営の執行状況を監視するとともに、財務報告に係る内部統制を含めた内部統制システムの整備・運用の状況等のモニタリングを通じ、取締役の職務の執行が法令・定款に適合し、業務が適正に遂行されているかどうかを監査するとともに、必要に応じ、その妥当性及び合理性といった範囲まで内部監査室との連携により監査を行ないます。

また、監査等委員自らも取締役会の構成員として取締役会において議決権を行使し、重要な業務執行の決定や役員の選定等に関与いたします。

監査等委員会は、内部監査室及び会計監査人と定期的に情報及び意見の交換を行い、監査結果の報告を受け、緊密な連携を図っております。監査等委員の職務の補助は、内部監査室が行っております。

d. 内部統制統括責任者

内部統制統括責任者は、リスク管理に関わるすべての活動を統括し、定期的に取り締役に報告しています。

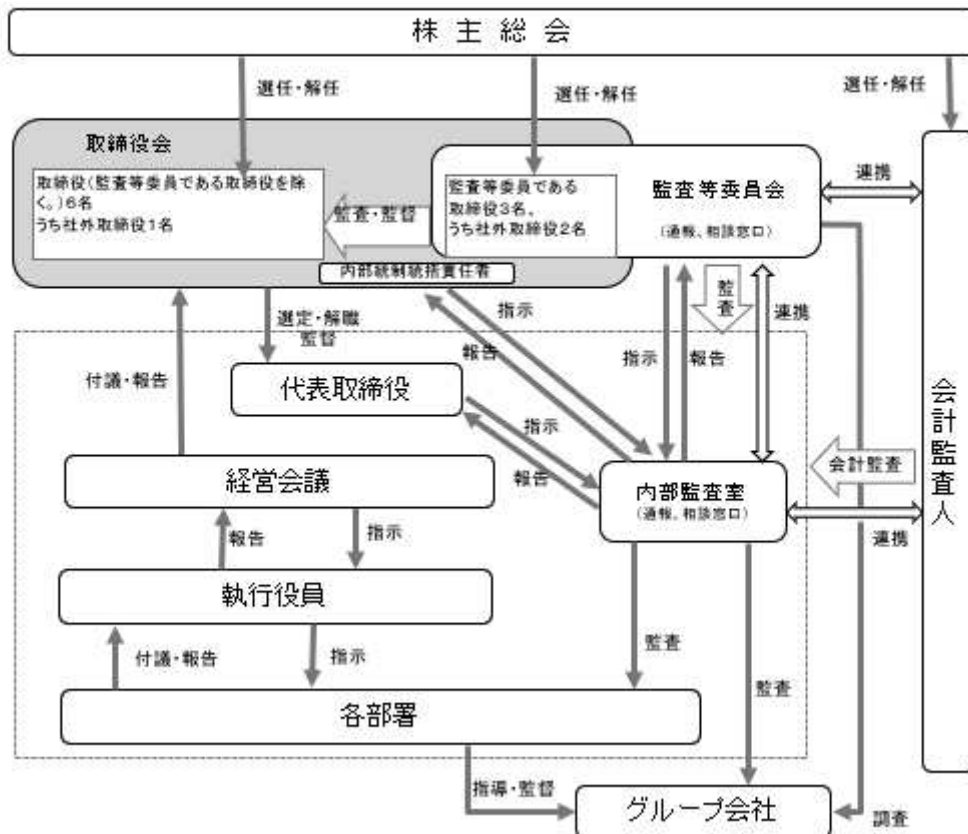
機関ごとの構成員は次のとおりであります。（◎は議長を表す。）

役職名	氏名	取締役会	監査等委員会	経営会議	内部統制統括責任者
代表取締役（社長執行役員）	笹野 幸明	◎		○	
取締役（専務執行役員）	有松 清高	○		○	
取締役（常務執行役員）	飯田 明彦	○		◎	◎
取締役（常務執行役員）	角谷 正昭	○		○	
取締役	三宅 利幸	○			
社外取締役	横山 幸則	○			
取締役（監査等委員）	平野 重充	○	◎		
社外取締役（監査等委員）	浜本 光浩	○	○		
社外取締役（監査等委員）	生川 友佳子	○	○		
常務執行役員	田中 博之			○	
執行役員	奥井 一史			○	
執行役員	川上 浩			○	
執行役員	永井 貴之			○	

なお、当社のコーポレート・ガバナンスの体制は次のように図示されます。

【参考資料：模式図】

（コーポレート・ガバナンスの体制図）



③ 企業統治に関するその他の事項

a. 内部統制システムの整備の状況

当社は、会社法及び会社法施行規則に基づき、業務の適正を確保するため内部統制システムの基本方針を取締役会において決議し、同取締役会で決議した内容に基づいて内部統制機能の整備に取り組んでおります。

具体的な取り組みとしては、社長直轄の独立部門として「内部監査室」（責任者1名、スタッフ4名）を設置し、内部監査を行い、当該監査の状況等を取締役会並びに監査等委員会へ報告を行い、監査等委員会との情報交換により連携を保ち、監査の有効性及び実効性を高めております。

当連結会計年度においては、グループ各社・各部門を対象としてコンプライアンスやリスク管理等を中心に内部監査を実施し、大きな是正や改善を要する指摘事項はないことを確認しております。

情報開示面につきましては、株主や投資家の皆様をはじめとする利害関係者への説明責任を果たし、経営の透明性を高めるために、管理本部において情報に関する適時開示を含めたIR活動を推進し、経営方針や業績に関する充実した情報開示に努めております。

なお、当社の業務の適正を確保するための基本方針は以下のとおりです。

1. 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- (1) 当社グループの役職員は、法令・定款を遵守し、各個人が企業人・社会人としての高度な倫理観に基づいて行動することを基本とする。
- (2) 当社は、『企業行動憲章』及び『グループコンプライアンス規程』を制定し、当社グループの全役職員に対し、これを要約した『TVEグループ役職員行動規範カード』の常時携帯を義務付け、その周知徹底を図る。
- (3) 当社は、コンプライアンスに係るすべての活動を統括する内部統制統括責任者を任命する。
- (4) 内部統制統括責任者は、当社グループ各社におけるコンプライアンス状況の監視・維持・情報収集を行い、活動の状況・成果は定期的に当社取締役会に報告する。
- (5) 当社グループにおいて重大な法令・定款違反及び不正の事実が判明した場合、または未然防止のため、『グループ内部通報規程』を制定する。また、当社グループの全役職員からの通報・相談に応じる窓口を設置し、法令遵守体制の整備及び推進に努める。

2. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

- (1) 当社は、当社グループの取締役の職務の執行に係る記録・文書の取り扱いについて、『取締役の職務執行に係る文書管理規程』を設け、適切に保存並びに閲覧の管理を行う。
- (2) 管理体制及び規程は定期的にその有効性を検証し、適宜最適化する。

3. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- (1) 当社は、経営に係るリスクを認識し、適正且つ効率的な業務運営のため、『グループリスク管理規程』を制定する。
- (2) 当社は、内部統制統括責任者を任命し、リスク管理に関わるすべての活動を統括する。
- (3) 内部監査室は、リスクベースの監査によってグループ各社・各部署に潜在するリスクの洗い出しと評価を行う。監査等委員会は内部監査室と連携し、取締役の業務執行の状況を監査する。是正・改善が必要な場合、グループ各社・各部署は、速やかにその対策を計画する。
- (4) 当社グループは、労働災害の撲滅に全力で取り組む。
- (5) 外部要因により当社グループに及ぶリスクについては、各担当執行役員を通じ情報を確実に入手し、迅速な意思決定により対策を行う。
- (6) 当社が把握したリスクは、有価証券報告書、決算短信等を通じ、「リスク情報」、「対処すべき課題」として積極的にステークホルダーに対し開示する。
- (7) 当社グループの製品等に起因し事故等が発生した場合は、直ちに顧客並びに当社従業員の安全を確保するとともに必要に応じ緊急対策本部（仮称・適宜決定）を設置し、情報管理の一元化を図り、適切且つ迅速な対応を行うことで、以後の安全確保と早期のプラントの復旧を行うとともに二次損害の防止に努めるものとし、火災、自然災害等の発生時においても同様とする。
- (8) 大規模な自然災害等の発生時においては、『事業継続計画』（BCP）に基づき、顧客、当社グループ従業員、取引先、地域住民の安全確保を最優先に行動することで企業としての社会的責任を果たし、早期の事業再開に努める。

4. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
 - (1) 取締役会は、中期経営計画においてグループ5ヵ年目標を策定し、その実現のための取組みを具現化し、進捗度合いを適宜管理する。
 - (2) 当社グループは、定例で開催される取締役会において、グループ各社の経営課題等の正確且つタイムリーな情報を伝達し、全役員の問題意識の共有化を行う。
 - (3) 取締役会は、時間的合理性を重視すべき場合においては、書面で決議するには適切でない事案を除き、会社法に定める書面決議制度を積極的に活用し、迅速な意思決定を行う。
 - (4) 当社は、独立性の高い社外取締役を置くことにより、取締役の職務執行に対する監督機能の維持・向上を図る。
5. 当社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
 - (1) 当社グループにおける業務の適正を確保するため、本基本方針はグループ全体に適用する。
 - (2) 当社は、『関係会社管理規程』に基づき、子会社の管理・監督を行い、業務の適正を確保する。
 - (3) 当社グループは、財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、法令等に従って信頼性のある財務報告を作成するための体制を構築・運用していく。
 - (4) 当社グループの財務報告の適正性を確保するため、業務プロセスにおける内部統制が適正に運用されていることを当社内部監査室が監査し、必要に応じ改善を行う。
6. 監査等委員会の職務を補助すべき取締役及び使用人に関する事項、当該取締役及び使用人の他の取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性に関する事項並びに当該取締役及び使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
 - (1) 監査等委員会の職務は、内部監査室が補助する。
 - (2) 内部監査室の使用人の異動・評価等は、監査等委員の意見も尊重し、取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性を確保する。また、監査等委員会の職務を補助する際、専ら監査等委員会の指揮命令に従う。
 - (3) 内部監査室は、監査等委員会の職務の補助を行う旨を規定し、実効性を確保する。
7. 取締役（監査等委員である取締役を除く。）及び使用人が監査等委員会に報告をするための体制その他の監査等委員会への報告に関する体制及びその他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制
 - (1) 監査等委員は、当社取締役会ほかグループ各社の重要会議に適宜出席するとともに、稟議書等の重要な文書を開覧し、必要に応じ、各社役職員に対しその説明を求める。
 - (2) 監査等委員は、内部監査室及び会計監査人と適宜に意見交換を行い、その連携を維持する。
 - (3) 監査等委員は、同じ独立した立場の社外取締役（監査等委員である取締役を除く。）と情報交換を行い、その連携を維持する。
 - (4) 当社取締役（監査等委員である取締役を除く。）は、当社監査等委員会に対し報告すべき法定の事項に加え、当社及び当社グループに重大な影響を及ぼす事項等について速やかに報告を行う。
 - (5) 当社従業員及び各子会社の全役職員が当社監査等委員会に対し報告すべき事実を知ったときは、当社監査等委員並びに内部監査室長を窓口とする『通報・相談窓口』を通じて報告する。
 - (6) 当社グループは、当該内部通報者に対し不利益な取り扱いを行わないことを規定する。
 - (7) 監査等委員は、職務の執行に必要な費用について請求することができる。当社グループは、当該請求が特に不合理でない限り前払い又は償還に応じる。
8. 反社会的勢力を排除するための体制
 - (1) 当社グループは、反社会的勢力には毅然として対応し、利益供与は一切行わないことを基本方針とする。
 - (2) 当社グループは、『TVEグループ役職員行動規範カード』にこの基本方針を定め、全役職員に当該行動規範の常時携帯を義務付け、基本方針の遵守を周知する。
 - (3) 当社グループは、所轄警察署や企業防衛対策協議会、近隣企業等から情報の収集を行い、関係を強化することにより反社会的勢力の排除に備える。

b. 責任限定契約の内容の概要

当社は、取締役及び監査等委員である取締役が期待された役割を十分に発揮することができ、また適切な人材を招聘できるよう、業務執行を行わない取締役及び監査等委員である取締役の責任限定契約に関する規定を定款に設けております。

・ 社外取締役の責任限定契約

会社法第423条第1項の責任について、その職務を行うにつき善意かつ重大な過失がないときは、100万円または法令に定める最低責任限度額のいずれか高い額を限度として、責任を負うものとしております。

当社は、社外取締役の横山幸則氏、監査等委員である社外取締役の浜本光浩氏及び生川友佳子氏との間で当該責任限定契約を締結しております。

c. 取締役の定数

当社の取締役（監査等委員である取締役を除く。）は10名以内、監査等委員である取締役は4名以内とする旨、定款に定めております。

d. 取締役の選任の決議要件

取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨、また、取締役の選任決議について、累積投票によらないものとする旨を定款に定めております。

e. 株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項

1) 自己株式の取得

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。これは、機動的な資本政策を遂行することを目的とするものであります。

2) 中間配当

当社は、取締役会の決議によって、毎年3月31日を基準日として、中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。これは、株主への機動的な利益還元の実施を可能とすることを目的とするものであります。

f. 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

① 役員一覧

男性 8名 女性 1名 (役員のうち女性の比率11%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(株)
代表取締役 (社長執行役員)	笹野 幸明	1953年9月10日	1982年3月 東亜エンジニアリング(株)入社 2010年4月 当社執行役員 営業本部長 2012年12月 当社取締役就任 常務執行役員 2014年7月 当社専務執行役員 2014年7月 東亜クリエイト(株)取締役就任 2014年10月 トウアバルブオーバーシーズPte. Ltd. 取締役社長就任 2015年4月 当社改革推進本部長 2015年12月 当社副社長執行役員 2016年6月 当社メンテナンス本部統括 2016年6月 トウアサービス(株)取締役就任 2017年12月 当社代表取締役就任 (現任) 社長執行役員 (現任)	(注) 3	7,897
取締役 (専務執行役員) 事業開発本部長	有松 清高	1958年5月7日	1982年3月 (株)北沢バルブ (現 (株)キッツ) 入社 2016年4月 同社バルブ事業統括本部プロダクトマネジメントセンター長代理 2016年12月 当社取締役就任 (現任) 2017年4月 (株)キッツ バルブ事業統括本部参事 2017年12月 トウアバルブオーバーシーズPte. Ltd. 取締役社長就任 (現任) 2017年12月 当社専務執行役員 (現任) 事業開発本部長 (現任) 2018年5月 東亜クリエイト(株)代表取締役副社長就任 (現任) 2019年10月 TVEリファインメタル(株)取締役就任 (現任)	(注) 3	3,017
取締役 (常務執行役員) 管理本部長 リスク管理担当、 内部統制統括責任者	飯田 明彦	1959年7月18日	1983年4月 東亜バルブ(株)入社 2004年12月 当社経理部長 2007年11月 トウアバルブオーバーシーズPte. Ltd. 取締役就任 (現任) 2008年10月 当社管理本部副本部長 経営企画室長 2012年7月 当社執行役員 管理本部長 (現任) 「七本の矢」作戦本部副本部長 2014年12月 トウアサービス(株)代表取締役社長就任 (現任) 2015年12月 当社取締役就任 (現任) 常務執行役員 (現任) 2016年6月 東亜クリエイト(株)取締役就任 (現任) 2016年12月 当社リスク管理担当 (現任) 内部統制統括責任者 (現任) 2019年10月 TVEリファインメタル(株)取締役就任 (現任)	(注) 3	4,615

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(株)
取締役 (常務執行役員) メンテナンス本部長	角谷 正昭	1959年1月15日	1981年4月 東亜エンジニアリング㈱入社 2008年10月 当社製造部長 総括安全衛生管理室長 2011年4月 当社バルブ製造事業部副事業部長 2012年7月 当社執行役員 製鋼製造本部長 バルブ製造本部副本部長 2014年12月 当社バルブ製造本部長 製鋼製造本部統括 2015年12月 トウアサービス㈱取締役就任(現任) 2015年12月 当社取締役就任(現任) 常務執行役員(現任) 2019年1月 当社技術本部長 2019年10月 当社メンテナンス本部長(現任)	(注) 3	5,115
取締役	三宅 利幸	1959年10月13日	1983年9月 東亜エンジニアリング㈱入社 2009年4月 当社メンテナンス事業部メンテナンス部長 2012年7月 当社参与メンテナンス本部副本部長兼メンテナンス部長 2015年12月 当社執行役員 メンテナンス本部長兼メンテナンス部長 2015年12月 トウアバルブオーバーシーズPte.Ltd. 取締役就任 2016年4月 当社執行役員メンテナンス本部長 2017年12月 当社取締役就任(現任) トウアサービス㈱取締役就任 2018年12月 トウアバルブオーバーシーズPte.Ltd. 取締役就任 2019年4月 当社取締役常務執行役員 メンテナンス本部長兼業開発本部リファインメタルプロジェクト室長 2019年10月 TVEリファインメタル㈱代表取締役社長(現任)	(注) 3	7,621
取締役	横山 幸則	1960年8月23日	1989年9月 西華産業㈱入社 2003年4月 同社北九州支店 営業課長 2008年4月 同社北九州支店長 2013年4月 同社福岡支店長 2016年4月 同社執行役員福岡支店長 2018年4月 同社上席執行役員営業統括本部副本部長電力事業所管兼大阪支社長兼広島支店長 2018年6月 ㈱竹本社外取締役(現任) 2019年4月 西華産業㈱上席執行役員営業統括本部副本部長電力事業所管兼大阪支社長(現任) 2019年12月 当社取締役就任(現任)	(注) 3	—
取締役 (常勤監査等委員)	平野 重充	1957年7月20日	1993年2月 東亜バルブ㈱入社 2003年3月 当社総務部総務課長 2005年10月 当社総務総括部主務兼総務課長 2008年10月 当社管理本部人事総務部長 2012年7月 当社参与管理本部副本部長兼人事総務部長 2015年12月 当社執行役員 2016年12月 トウアサービス㈱監査役就任(現任) 2016年12月 東亜クリエイト㈱監査役就任(現任) 2016年12月 当社取締役(常勤監査等委員)就任(現任) 2019年10月 TVEリファインメタル㈱監査役就任(現任)	(注) 4	900

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 (監査等委員)	浜本 光浩	1970年4月18日	2000年10月 弁護士登録 2000年10月 山田忠史法律事務所入所 2004年10月 きっかわ法律事務所入所 2008年4月 同所パートナー弁護士 2014年12月 当社取締役就任 2016年12月 当社取締役(監査等委員)就任(現任) 2017年6月 ㈱ワコールホールディングス社外監査役就任(現任) 2019年2月 浜本綜合法律事務所代表弁護士(現任) 2019年5月 大阪兵庫生コンクリート工業組員外監事(現任)	(注) 4	—
取締役 (監査等委員)	生川 友佳子	1974年4月20日	1997年4月 オリックス㈱入社 1998年6月 齊藤会計事務所入所 2001年9月 公認会計士・税理士古本正事務所(現デロイト トーマツ税理士法人)入所 2003年3月 税理士登録 2012年7月 デロイト トーマツ税理士法人 ディレクター 2015年10月 生川友佳子税理士事務所所長(現任) 2015年12月 当社監査役就任 2016年12月 当社取締役(監査等委員)就任(現任) 2018年6月 KaimanaHila合同会社代表社員(現任) 2019年3月 アース製菓株式会社社外監査役(現任)	(注) 4	—
計					29,165

- (注) 1. 横山幸則、浜本光浩及び生川友佳子は、社外取締役であります。
2. 2019年12月24日開催の定時株主総会の終結の時から1年間であります。
3. 2018年12月21日開催の定時株主総会の終結の時から2年間であります。
4. 当社は、法令に定める監査等委員である取締役の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠の監査等委員である取締役を1名選任しております。補欠の監査等委員である取締役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (株)
鈴木 浩巳	1960年4月13日	1986年1月 司法書士登録 1986年1月 鈴木司法書士事務所入所 2005年4月 同所所長(現任)	—

5. 当社は、意思決定・監督と執行を分離することにより、事業環境の変化に対して迅速かつ効率的に対応できる経営体制を構築・運用するため、執行役員制度を導入しております。執行役員は8名で構成され、取締役を兼務しない執行役員は次の4名であります。

役名	氏名	職名
常務執行役員	田中 博之	品質保証統括
執行役員	奥井 一史	営業本部長、東京支社長
執行役員	川上 浩	製造本部長、総括安全衛生管理者
執行役員	永井 貴之	技術本部長

② 社外役員の状況

当社の社外取締役3名（うち監査等委員である社外取締役2名）は、当社と取引関係等の利害関係はありません。

・社外取締役である横山幸則氏は、機械分野における総合商社での豊富な経験と電力関連ビジネスに関する幅広い見識を活かし、当社の経営に適切な発言を適宜行って頂くため選任しております。なお、同氏は、西華産業株式会社の上席執行役員営業統括本部副本部長電力事業所管兼大阪支社長であり、西華産業株式会社と当社との間には営業取引関係及び出資関係があります。また、同氏は株式会社竹本の社外取締役ですが、同社と当社との間に特別な関係はありません。

・浜本光浩氏は、監査等委員である社外取締役です。同氏は、直接会社経営に関与された経験はありませんが、弁護士としての経験と専門知識を活かし、当社の経営に適切な助言を適宜行っており、同氏の適切な助言は当社のガバナンス体制の強化に繋がっております。また、同氏は、一般株主と利益相反の生じる恐れのない独立役員であり、東京証券取引所に対して独立役員届出書を提出しております。なお、当社は、同氏が在籍していたきっかわ法律事務所と顧問契約を締結しておりますが、当社が同事務所に支払っている顧問料は、同事務所の業務規模に比して少額であったため、同事務所は当社に対して特段の依存はしておりません。従って、同氏は、一般株主と利益相反が生じるおそれがないことから独立性が保たれていると判断しております。同氏は浜本総合法律事務所の代表弁護士及び株式会社ワコールホールディングスの社外監査役ですが、同所及び同社と当社との間に特別な関係はありません。また、同氏は大阪兵庫生コンクリート工業組合の員外監事ですが、同組合と当社との間に特別な関係はありません。

・生川友佳子氏は、監査等委員である社外取締役です。同氏は、直接会社経営に関与した経験はありませんが、同氏の税理士としての経験と専門知識を当社の監査体制に活かすため選任しております。また、同氏は、一般株主と利益相反の生じる恐れのない独立役員であり、東京証券取引所に対して独立役員届出書を提出しております。なお、同氏は、当社と業務委託関係にあるデロイト トーマツ税理士法人の出身者（2015年9月退職）ですが、生川友佳子氏個人と当社との間には直接の取引関係はありません。同氏は、生川友佳子税理士事務所の所長であり、同所と当社との間には特別な関係はありません。また、同氏はKaimanaHila合同会社の代表社員及びアース製薬株式会社の社外監査役ですが、両社と当社との間には特別な関係はありません。従って、同氏は、一般株主と利益相反が生じるおそれがないことから独立性が保たれていると判断しております。

当社は、社外取締役の選任につきまして、各役員のビジネス経験、専門性及び独立性などを総合的に勘案し、決定しております。なお、社外取締役を選任するための当社からの独立性に関する基準又は方針は定めておりませんが、東京証券取引所が定める独立性に関する判断基準を参考にすのほか、客観的な視点から当社の経営等に対し、適切に意見を述べていただける方を選任しております。

③ 社外取締役による監督又は監査と内部監査、監査等委員会監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は、出席した取締役会において、毎回報告事項や決議事項について適宜質問するとともに、取締役会の意思決定の妥当性・適正性を確保するための発言を行っております。また、監査等委員会においては、社外取締役として行った監査の報告をし、毎回他の監査等委員である取締役が行った監査について適宜質問をするとともに、必要に応じ社外の立場から意見を述べております。さらに、必要に応じて、内部監査室及び会計監査人と情報交換や意見交換を行うなど、相互連携を図っております。

(3) 【監査の状況】

① 監査等委員会監査の状況

監査等委員会監査の状況につきましては、(1) コーポレート・ガバナンスの概要 ②企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由 c. 監査等委員会に記載のとおりであります。

なお、監査等委員生川友佳子氏は税理士の資格を有しており、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

② 内部監査の状況

内部監査室は、5名で構成され、当社の内部統制が有効に機能し、業務効率の維持、遵法性の確保、財務報告が適切に行われているかについて、監査等委員会、会計監査人と連携しながら監査を実施しております。また内部統制の目的を阻害する要因となるリスクが適切に評価されコントロールされているかについて確認を行い、適切なアドバイスにより内部統制システムの改善を促します。

③ 会計監査の状況

a. 監査法人の名称

有限責任監査法人トーマツ

b. 業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員 和田朝喜氏

指定有限責任社員 業務執行社員 西方実氏

c. 監査業務に係る補助者の構成

公認会計士8名、その他6名

d. 監査法人の選定方針と理由

当社は、独立性、監査活動の適切性・妥当性などを総合的に勘案し、監査法人を選定しております。

当社の監査等委員会は、会計監査人の職務の執行に支障がある場合等、その必要があると判断した場合、株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定いたします。

また、監査等委員会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められ、かつ改善の見込みがないと判断した場合は、監査等委員全員の同意に基づき、会計監査人を解任いたします。

e. 監査等委員及び監査等委員会による監査法人の評価

当社監査等委員会は、会計監査人の業務遂行状況について、一定の基準を設け、関係部門(管理本部・内部監査室)の評価も勘案しつつ、定期的な評価を実施しております。

④ 監査報酬の内容等

「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」(2019年1月31日内閣府令第3号)による改正後の「企業内容等の開示に関する内閣府令」第二号様式記載上の注意(56) d (f) i から iiiの規定に経過措置を適用しております。

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
提出会社	28,000	—	27,500	1,230
連結子会社	—	—	—	—
計	28,000	—	27,500	1,230

監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容

(前連結会計年度)

該当事項はありません。

(当連結会計年度)

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、「収益認識に関する会計基準」の適用準備に関する助言・指導業務であります。

b. その他重要な報酬の内容

該当事項はありません。

c. 監査報酬の決定方針

当社の会計監査人に対する監査報酬の決定方針といたしましては、会計監査人が策定した監査計画、監査内容、監査日数等を勘案し、両者で協議の上で監査報酬を決定しております。

d. 監査等委員会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社の監査等委員会は、会計監査人より提示された監査計画および監査報酬見積りの算出根拠等が適切であるかどうかについて必要な検証を行いました。その結果、当社の規模、複雑性、リスクに照らして、管理本部が提案した会計監査人に対する報酬等について相当であると認め、会社法第399条第1項の同意をしております。

(4) 【役員の報酬等】

① 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)			対象となる 役員の員数 (名)
		基本報酬	譲渡制限付 株式報酬	賞与	
取締役(監査等委員を除く) (社外取締役を除く)	132,906	88,545	10,526	33,835	7
取締役(監査等委員) (社外取締役を除く)	14,774	11,520	—	3,254	1
社外役員	12,310	9,600	—	2,710	2
合計	159,990	109,665	10,526	39,799	10

(注) 1. 株主総会決議による年間報酬限度額は次の通りであります。

取締役(監査等委員である取締役を除く)の報酬額(使用人兼務役員の使用人分給与は含みません。)

年額 200百万円以内(2016年12月22日開催の定時株主総会)

監査等委員である取締役の報酬額

年額 50百万円以内(2016年12月22日開催の定時株主総会)

2. 当事業年度末現在の人員は、取締役(監査等委員である取締役を除く。)7名、監査等委員である取締役3名の合計10名であり、これには2018年12月21日開催の定時株主総会終結の時をもって退任した監査等委員ではない取締役1名を含みます。

② 役員の報酬等の額またはその算定方法の決定に関する方針に係る事項

1. 当社の取締役(監査等委員の取締役を除く)の報酬は、外部の役員報酬調査に参加するなど客観的に報酬水準を把握したうえで取締役会の審議により決定しております。

2018年度における取締役(監査等委員の取締役を除く)の報酬は、基本報酬、賞与、株式報酬により構成されております。

(1) 基本報酬は役位ごとに基準額を設定しております。

(2) 賞与は業績に連動して支給する仕組みとしております。業績に連動する指標として経常利益(連結)を採用し、当期の役員賞与算定に用いる目標を設定しております。支給額の算定は、目標の達成率に応じた一定の係数により役員賞与基準額を算定し、各役員の役位、個別の評価に応じた加減を行うことで支給額を決定しております。なお、業績の評価は取締役社長に一任しております。また、この算定方法は、前事業年度より採用しております。

・当事業年度における当該目標額と実績は次のとおりであります。なお、実績は役員賞与の最終支給額が確定する前の数字であるため連結損益計算書の経常利益とは一致いたしません。

事業年度	前連結会計年度(百万円)	当連結会計年度(百万円)
目標	601	637
実績	635	629

(3) 株式報酬について

当社は2017年12月22日開催の第18回定時株主総会において、新たに譲渡制限付株式報酬制度の導入を決定し、2018年1月より、取締役(監査等委員である取締役と社外取締役を除く。以下「対象者」という。)に株式の割り当てを実施しております。

本制度は株価変動のメリットとリスクを株主と共有し、株価上昇及び企業価値向上への貢献意欲を従来以上に高めることを目的としております。なお、株式報酬の支給額の算定方法は概ね以下のとおりです。

・無役の取締役に對する金銭債権の支給額(1,500千円)を基準として、これに役位毎に設定した係数を乗じること、各対象者に支給する金銭債権額を決定し、この金銭債権額を現物出資の方法で給付することと引き換えに、譲渡制限付き株式を割り当てております。

2. 監査等委員である取締役の報酬は、外部の役員報酬調査に参加するなど客観的に報酬水準を把握したうえで監査等委員の協議により決定しております。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、株式の価値変動または株式に係る配当によって利益を受けることを目的とするいわゆる純投資目的の株式は保有しておりません。純投資以外を目的とするいわゆる政策保有株式については、当社グループの経営方針に照らして、当社と被保有企業の双方において企業価値向上に資するものに限定しております。

② 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社では、取締役会において1年に1度を目処に、当社が保有する政策保有株式の個別銘柄について、保有目的、取引関係、投資効果等を総合的に検証し、保有の適否を判断しております。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額 (千円)
非上場株式	4	2,620
非上場株式以外の株式	18	905,099

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額 (千円)	株式数の増加の理由
非上場株式	—	—	—
非上場株式以外の株式	1	360,118	取引関係の維持強化のため

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額 (千円)
非上場株式	—	—
非上場株式以外の株式	—	—

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報
特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (千円)	貸借対照表計上額 (千円)		
㈱キッツ	436,000	—	保有目的及び株式数が増加した理由は、 ㈱キッツと当社は、パルプ事業に関する 両社の企業価値の向上を目指して資本業 務提携契約を締結しており、業務提携、 営業連携による継続的な取引関係の維 持・強化のため新規取得いたしました。	有
	313,484	—		
三菱商事㈱	103,000	103,000	当社の総代理店であり、継続的な取引 関係の維持強化のため保有してありま す。	無
	273,053	360,603		
三菱重工業㈱	23,000	23,000	取引関係の維持強化のため保有してあり ます。	無
	97,336	100,901		
西華産業㈱	54,000	54,000	当社の代理店であり、継続的な取引関 係の維持強化のため保有してあります。	有
	71,550	108,378		
西日本旅客鉄道㈱	5,000	5,000	地域社会の発展・繁栄のため保有してあ ります。	無
	45,655	39,605		
明和産業㈱	76,000	76,000	取引関係の維持強化のため保有していま すが、保有の目的・意義が希薄化してい るため縮減を検討しております。	無
	38,456	38,000		
㈱三菱UFJフィナ ンシャル・グループ	40,400	40,400	同社子会社の三菱UFJ銀行は当社メイ ンバンクであり、取引関係の維持強化の ため保有してあります。	無
	22,155	28,647		
関西電力㈱	12,000	12,000	当社の主要な取引先であり、継続的な 取引関係の維持強化のため保有してあり ます。	無
	14,502	20,556		
日本ギア工業㈱	25,000	25,000	当社の主要な仕入先であり、継続的な 取引関係の維持強化のため保有してあり ます。	有
	10,650	11,800		
㈱IHI	2,900	2,900	取引関係の維持強化のため保有していま すが、保有の目的・意義が希薄化してい るため縮減を検討しております。	無
	6,809	12,484		
いちよし証券㈱	4,620	4,620	取引関係の維持強化のため保有してあり ます。	無
	3,136	5,456		
九州電力㈱	3,000	3,000	当社の主要な取引先であり、継続的な 取引関係の維持強化のため保有してあり ます。	無
	3,060	4,113		
住友電気工業㈱	1,100	1,100	取引関係の維持強化のため保有していま すが、保有の目的・意義が希薄化してい るため縮減を検討しております。	無
	1,508	1,960		
東京電力ホールディ ングス㈱	2,000	2,000	取引関係の維持強化のため保有してあり ます。	無
	1,058	1,116		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数（株）	株式数（株）		
	貸借対照表計上額 （千円）	貸借対照表計上額 （千円）		
㈱三十三フィナンシャルグループ	630	630	取引関係の維持強化のため保有していますが、保有の目的・意義が希薄化しているため縮減を検討しております。	無
	1,011	1,514		
㈱神戸製鋼所	1,000	1,000	取引関係の維持強化のため保有していますが、保有の目的・意義が希薄化しているため縮減を検討しております。	無
	576	1,010		
㈱中北製作所	200	200	取引関係の維持強化のため保有していますが、保有の目的・意義が希薄化しているため縮減を検討しております。	無
	567	609		
㈱三井住友フィナンシャルグループ	144	144	取引関係の維持強化のため保有していますが、保有の目的・意義が希薄化しているため縮減を検討しております。	無
	532	660		

（注）定量的な保有効果については、記載が困難ですが、取締役会では、毎年、個別銘柄毎に事業戦略や事業上の関係、保有リスク等の観点から検証を行い、保有継続の可否を判断しております。

- ③ 保有目的が純投資目的である投資株式
該当事項はありません。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（1976年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。）に基づいて作成しております。

なお、当連結会計年度（2018年10月1日から2019年9月30日まで）の連結財務諸表に含まれる比較情報のうち、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」（2018年3月23日内閣府令第7号。以下「改正府令」という。）による改正後の連結財務諸表規則第15条の5第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第3条第2項により、改正前の連結財務諸表規則に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（1963年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2018年10月1日から2019年9月30日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2018年10月1日から2019年9月30日まで）の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツにより監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、企業会計基準委員会等の行う様々な研修に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年9月30日)	当連結会計年度 (2019年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	2,717,959	3,330,102
受取手形及び売掛金	※ ₃ 3,787,474	3,135,150
電子記録債権	156,833	85,809
商品及び製品	※ ₄ 54,558	※ ₄ 175,556
仕掛品	※ ₄ 991,723	※ ₄ 1,474,023
原材料及び貯蔵品	619,157	560,545
その他	63,450	79,386
流動資産合計	8,391,157	8,840,572
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	※ ₂ 465,297	※ ₂ 486,355
機械装置及び運搬具（純額）	※ ₂ 519,041	※ ₂ 442,349
土地	※ ₂ 261,363	※ ₂ 261,363
リース資産（純額）	14,059	74,027
建設仮勘定	7,456	29,208
その他（純額）	※ ₂ 44,585	※ ₂ 48,292
有形固定資産合計	※ ₁ 1,311,804	※ ₁ 1,341,596
無形固定資産		
ソフトウェア	211,505	188,556
リース資産	24,167	68,395
その他	12,752	12,052
無形固定資産合計	248,426	269,004
投資その他の資産		
投資有価証券	768,262	934,062
繰延税金資産	2,831	255,989
その他	63,616	71,770
貸倒引当金	△10,724	△10,724
投資その他の資産合計	823,985	1,251,097
固定資産合計	2,384,216	2,861,697
資産合計	10,775,374	11,702,270

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年9月30日)	当連結会計年度 (2019年9月30日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	501,678	711,017
電子記録債務	97,057	114,958
1年内返済予定の長期借入金	80,808	※2 72,762
リース債務	16,479	41,274
未払法人税等	75,804	172,148
賞与引当金	319,631	336,302
役員賞与引当金	43,438	39,799
受注損失引当金	※4 321,477	※4 451,605
その他	454,956	412,658
流動負債合計	1,911,333	2,352,526
固定負債		
長期借入金	16,162	※2 210,000
リース債務	24,805	105,126
繰延税金負債	134,685	—
P C B 処理引当金	17,812	2,838
退職給付に係る負債	751,614	726,704
その他	79,097	11,769
固定負債合計	1,024,177	1,056,438
負債合計	2,935,510	3,408,965
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,739,559	1,739,559
資本剰余金	2,018,103	2,012,806
利益剰余金	4,385,373	5,019,994
自己株式	△671,241	△655,665
株主資本合計	7,471,794	8,116,695
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	328,117	193,867
為替換算調整勘定	16,403	1,980
退職給付に係る調整累計額	△46,642	△19,498
その他の包括利益累計額合計	297,878	176,349
非支配株主持分	70,191	261
純資産合計	7,839,864	8,293,305
負債純資産合計	10,775,374	11,702,270

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
売上高	8,105,228	8,239,059
売上原価	※1 6,151,204	※1 6,156,618
売上総利益	1,954,024	2,082,440
販売費及び一般管理費		
販売手数料	181,031	182,807
荷造運搬費	41,332	42,419
役員報酬	145,328	136,340
役員賞与引当金繰入額	43,438	39,799
賞与引当金繰入額	67,329	72,612
貸倒引当金繰入額	920	—
給料及び手当	437,757	420,538
退職給付費用	26,151	26,132
法定福利費	92,664	90,010
旅費及び交通費	47,153	55,328
交際費	14,912	19,216
地代家賃	42,342	45,222
研究開発費	※2 44,267	※2 143,250
雑費	224,787	288,028
販売費及び一般管理費合計	1,409,417	1,561,704
営業利益	544,606	520,736
営業外収益		
受取利息	244	275
受取配当金	21,477	27,551
受取家賃	6,753	6,757
受取保険金	516	15,495
作業くず売却益	6,871	8,447
貸倒引当金戻入額	218	—
雑収入	5,191	5,730
営業外収益合計	41,273	64,257
営業外費用		
支払利息	1,708	1,580
支払手数料	1,500	1,000
為替差損	176	4,170
雑損失	1,159	1,393
営業外費用合計	4,544	8,144
経常利益	581,335	576,849
特別利益		
固定資産売却益	※3 263	※3 39
特別利益合計	263	39
特別損失		
固定資産処分損	※4 1,809	※4 2,456
投資有価証券評価損	—	983
特別損失合計	1,809	3,440
税金等調整前当期純利益	579,790	573,449
法人税、住民税及び事業税	86,505	187,913
法人税等調整額	843	△328,705
法人税等合計	87,349	△140,792
当期純利益	492,440	714,241
非支配株主に帰属する当期純利益又は非支配株主に 帰属する当期純損失(△)	12,399	△130
親会社株主に帰属する当期純利益	480,040	714,372

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
当期純利益	492,440	714,241
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	27,942	△134,250
為替換算調整勘定	△229	△14,423
退職給付に係る調整額	14,246	27,144
その他の包括利益合計	※ 41,958	※ △121,529
包括利益	534,399	592,712
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	521,999	592,843
非支配株主に係る包括利益	12,399	△130

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年10月1日 至 2018年9月30日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	1,739,559	2,019,967	3,973,464	△683,284	7,049,706
当期変動額					
剰余金の配当			△68,131		△68,131
親会社株主に帰属する当期純利益			480,040		480,040
自己株式の取得				△349	△349
自己株式の処分		△1,864		12,391	10,527
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	△1,864	411,909	12,042	422,087
当期末残高	1,739,559	2,018,103	4,385,373	△671,241	7,471,794

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	300,175	16,632	△60,889	255,919	57,791	7,363,417
当期変動額						
剰余金の配当						△68,131
親会社株主に帰属する当期純利益						480,040
自己株式の取得						△349
自己株式の処分						10,527
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	27,942	△229	14,246	41,958	12,399	54,358
当期変動額合計	27,942	△229	14,246	41,958	12,399	476,446
当期末残高	328,117	16,403	△46,642	297,878	70,191	7,839,864

当連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	1,739,559	2,018,103	4,385,373	△671,241	7,471,794
当期変動額					
剰余金の配当			△79,751		△79,751
親会社株主に帰属する当期純利益			714,372		714,372
自己株式の取得				△246	△246
自己株式の処分		△5,296		15,822	10,526
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	△5,296	634,620	15,576	644,900
当期末残高	1,739,559	2,012,806	5,019,994	△655,665	8,116,695

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	328,117	16,403	△46,642	297,878	70,191	7,839,864
当期変動額						
剰余金の配当						△79,751
親会社株主に帰属する当期純利益						714,372
自己株式の取得						△246
自己株式の処分						10,526
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△134,250	△14,423	27,144	△121,529	△69,930	△191,459
当期変動額合計	△134,250	△14,423	27,144	△121,529	△69,930	453,441
当期末残高	193,867	1,980	△19,498	176,349	261	8,293,305

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	579,790	573,449
減価償却費	284,673	292,813
貸倒引当金の増減額 (△は減少)	702	—
賞与引当金の増減額 (△は減少)	40,490	16,670
役員賞与引当金の増減額 (△は減少)	21,430	△3,639
受注損失引当金の増減額 (△は減少)	△173,724	130,127
P C B 処理引当金の増減額 (△は減少)	△440	△14,973
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	△14,031	2,235
受取利息及び受取配当金	△21,721	△27,826
受取保険金	△516	△15,495
支払利息	1,708	1,580
固定資産売却損益 (△は益)	△263	△39
固定資産処分損益 (△は益)	1,809	2,456
投資有価証券評価損益 (△は益)	—	983
売上債権の増減額 (△は増加)	△1,526,979	723,348
たな卸資産の増減額 (△は増加)	60,859	△544,685
仕入債務の増減額 (△は減少)	8,550	227,240
前受金の増減額 (△は減少)	48,690	△85,543
未払消費税等の増減額 (△は減少)	16,335	△27,803
その他	76,049	△18,734
小計	△596,586	1,232,162
利息及び配当金の受取額	20,571	27,772
利息の支払額	△1,645	△1,694
保険金の受取額	516	15,495
法人税等の支払額	△97,005	△105,145
法人税等の還付額	1,492	1,278
営業活動によるキャッシュ・フロー	△672,656	1,169,869
投資活動によるキャッシュ・フロー		
投資有価証券の取得による支出	—	△360,118
有形固定資産の取得による支出	△214,198	△149,255
有形固定資産の売却による収入	550	43
有形固定資産の除却による支出	△476	△801
無形固定資産の取得による支出	△136,721	△40,535
長期貸付金の回収による収入	1,589	117
その他	3,076	△9,621
投資活動によるキャッシュ・フロー	△346,181	△560,173
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入れによる収入	—	300,000
長期借入金の返済による支出	△285,844	△114,208
リース債務の返済による支出	△16,479	△17,584
自己株式の取得による支出	△349	△246
配当金の支払額	△68,218	△79,945
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出	—	△70,233
その他	△1,500	△999
財務活動によるキャッシュ・フロー	△372,391	16,781
現金及び現金同等物に係る換算差額	△221	△14,335
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△1,391,451	612,142
現金及び現金同等物の期首残高	4,109,411	2,717,959
現金及び現金同等物の期末残高	※1 2,717,959	※1 3,330,102

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 3社

連結子会社の名称

- ・ トウアサービス株式会社
- ・ 東亜クリエイト株式会社
- ・ トウアパルプオーバーシーズ P t e . L t d . (シンガポール)

(2) 非連結子会社の名称

該当ありません。

2. 持分法の適用に関する事項

該当事項はありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、いずれも9月30日であり、連結財務諸表提出会社と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券の評価基準及び評価方法

a. 満期保有目的の債券

償却原価法(定額法)

b. その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

② デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法

③ たな卸資産の評価基準及び評価方法

a. 製品及び仕掛品

主として個別法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下による簿価切下げの方法により算定)

b. 原材料及び貯蔵品

主として移動平均法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下による簿価切下げの方法により算定)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産(リース資産を除く)

在外連結子会社1社を除き定率法によっており、在外連結子会社1社は定額法によっております。

ただし、定率法償却を行っている会社においても1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)並びに2016年

4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法によっております。

なお、主な資産の耐用年数は以下のとおりであります。

建物及び構築物 28年～45年

機械装置及び運搬具 4年～12年

② 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法によっております。

ソフトウェア(自社利用分)については、社内における利用可能期間(5年)に基づいております。

③ リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

④ 長期前払費用

定額法によっております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権等の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権及び破産更生債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

② 賞与引当金

従業員への賞与及び取締役でない執行役員への賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき当連結会計年度負担額を計上しております。

- ③ 役員賞与引当金
役員賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき当連結会計年度負担額を計上しております。
- ④ 受注損失引当金
受注案件に係る将来の損失に備えるため、当連結会計年度末において将来の損失が見込まれ、かつ、当該損失額を合理的に見積可能なものについては、損失見積額を引当計上しております。
- ⑤ PCB処理引当金
PCB(ポリ塩化ビフェニル)廃棄物の処理費用の支出に備えるため、処理費用及び収集運搬費用の見積額を計上しております。
- (4) 退職給付に係る会計処理の方法
- ① 退職給付見込額の期間帰属方法
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。
- ② 数理計算上の差異の費用処理方法
数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日翌連結会計年度から費用処理しております。
- (5) 重要な外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算の基準
外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社の資産及び負債は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めて計上しております。
- (6) 重要なヘッジ会計の方法
原則として繰延ヘッジ処理によっております。
- (7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲
手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。
- (8) その他の連結財務諸表作成のための重要な事項
消費税等の会計処理
消費税等の会計処理は、税抜き方式によっております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2018年3月30日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2018年3月30日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際会計基準審議会(IASB)及び米国財務会計基準審議会(FASB)は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、2014年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606)を公表しており、IFRS第15号は2018年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は2017年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

2022年9月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当連結会計年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更するとともに、税効果会計関係注記を変更しております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」2,831千円は、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」に表示しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。)及び同注解(注9)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(連結損益計算書)

前連結会計年度において、「営業外収益」の「雑収入」に含めていた「受取保険金」は、営業外収益の総額の100分の10を超えたため、当連結会計年度より独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外収益」の「雑収入」に表示していた5,707千円は、「受取保険金」516千円、「雑収入」5,191千円として組み替えております。

前連結会計年度において、「営業外費用」の「雑損失」に含めていた「為替差損」は、営業外費用の総額の100分の10を超えたため、当連結会計年度より独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外費用」の「雑損失」に表示していた1,336千円は、「為替差損」176千円、「雑損失」1,159千円として組み替えております。

(連結キャッシュ・フロー計算書)

前連結会計年度において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に含めていた「受取保険金」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より区分掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に表示していた75,533千円は、「受取保険金」△516千円、「その他」76,049千円として組み替えております。

前連結会計年度において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「利息及び配当金の受取額」に含めていた「保険金の受取額」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より区分掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「利息及び配当金の受取額」に表示していた21,087千円は、「保険金の受取額」516千円、「利息及び配当金の受取額」20,571千円として組み替えております。

(連結貸借対照表関係)

※1. 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (2018年9月30日)	当連結会計年度 (2019年9月30日)
	7,269,500千円	7,363,652千円

※2. 担保に供している資産

担保に供している資産並びに担保付債務は次のとおりであります。

[担保提供資産]

	前連結会計年度 (2018年9月30日)		当連結会計年度 (2019年9月30日)	
建物及び構築物	215,249千円	(162,837千円)	226,329千円	(177,409千円)
機械装置及び運搬具	307,977	(307,977)	261,517	(261,517)
土地	201,694	(3,702)	201,694	(3,702)
その他(工具、器具及び備品)	0	(0)	0	(0)
計	724,921	(474,517)	689,541	(442,629)

[対応債務]

	前連結会計年度 (2018年9月30日)		当連結会計年度 (2019年9月30日)	
1年内返済予定の長期借入金	－千円	(－千円)	60,000千円	(60,000千円)
長期借入金	－	(－)	210,000	(210,000)
計	－	(－)	270,000	(270,000)

上記のうち、()内書は工場財団抵当並びに当該債務を示しております。

※3. 期末日満期手形

期末日満期手形の会計処理については、満期日に決済が行われたものとして処理しております。期末日満期手形の金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年9月30日)	当連結会計年度 (2019年9月30日)
受取手形	12,763千円	－千円

※4. 受注損失引当金

前連結会計年度(2018年9月30日)

損失の発生が見込まれる工事契約に係るたな卸資産と受注損失引当金は、相殺せずに両建てで表示しております。

損失の発生が見込まれる工事契約に係るたな卸資産のうち、受注損失引当金に対応する額は、143,594千円(うち、商品及び製品10,788千円、仕掛品132,806千円)であります。

当連結会計年度(2019年9月30日)

損失の発生が見込まれる工事契約に係るたな卸資産と受注損失引当金は、相殺せずに両建てで表示しております。

損失の発生が見込まれる工事契約に係るたな卸資産のうち、受注損失引当金に対応する額は、218,527千円(うち、商品及び製品7,697千円、仕掛品210,830千円)であります。

5. 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため主要取引金融機関と特定融資枠契約及びコミットメントライン契約を締結しております。これら契約に基づく特定融資枠契約及びコミットメントラインの総額に係る借入未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年9月30日)	当連結会計年度 (2019年9月30日)
特定融資枠契約及びコミットメントラインの総額	1,100,000千円	1,100,000千円
借入実行残高	—	—
差引額	1,100,000	1,100,000

(連結損益計算書関係)

※1. 売上原価に含まれている受注損失引当金繰入額 (△は戻入額)

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
	△173,724千円	130,127千円

※2. 一般管理費に含まれる研究開発費

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
	44,267千円	143,250千円

※3. 固定資産売却益の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
機械装置及び運搬具	225千円	39千円
その他(工具、器具及び備品)	37	—
計	263	39

※4. 固定資産処分損の内容は、次のとおりであります。

(有形固定資産の除却によるもの)

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
建物及び構築物	175千円	157千円
機械装置及び運搬具	694	277
その他(工具、器具及び備品)	5	563
撤去費用	933	1,195
計	1,809	2,193

(無形固定資産の除却によるもの)

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
ソフトウェア	—千円	262千円

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	40,250千円	△194,372千円
組替調整額	—	983
税効果調整前	40,250	△193,389
税効果額	△12,308	59,138
その他有価証券評価差額金	27,942	△134,250
為替換算調整勘定：		
当期発生額	△229	△14,423
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	△20,809	16,973
組替調整額	35,056	10,171
税効果調整前	14,246	27,144
税効果額	—	—
退職給付に係る調整額	14,246	27,144
その他の包括利益合計	41,958	△121,529

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数 (株)	当連結会計年度増加 株式数 (株)	当連結会計年度減少 株式数 (株)	当連結会計年度末 株式数 (株)
発行済株式				
普通株式	2,678,600	—	—	2,678,600
合計	2,678,600	—	—	2,678,600
自己株式				
普通株式 (注)	411,187	263	7,456	403,994
合計	411,187	263	7,456	403,994

(注) 普通株式の自己株式の増加263株は、単元未満株式の買取によるものであり、減少7,456株は、2018年1月30日に実施した譲渡制限付株式報酬としての自己株式の処分によるものであります。

2. 新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2017年12月22日 定時株主総会	普通株式	34,011	15	2017年9月30日	2017年12月25日
2018年5月11日 取締役会	普通株式	34,120	15	2018年3月31日	2018年6月18日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2018年12月21日 定時株主総会	普通株式	45,492	利益剰余金	20	2018年9月30日	2018年12月25日

当連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数（株）	当連結会計年度増加 株式数（株）	当連結会計年度減少 株式数（株）	当連結会計年度末 株式数（株）
発行済株式				
普通株式	2,678,600	—	—	2,678,600
合計	2,678,600	—	—	2,678,600
自己株式				
普通株式（注）	403,994	209	9,526	394,677
合計	403,994	209	9,526	394,677

（注）普通株式の自己株式の増加209株は、単元未満株式の買取によるものであり、減少9,526株は、2019年1月30日に実施した譲渡制限付株式報酬としての自己株式の処分によるものであります。

2. 新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2018年12月21日 定時株主総会	普通株式	45,492	20	2018年9月30日	2018年12月25日
2019年5月10日 取締役会	普通株式	34,259	15	2019年3月31日	2019年6月17日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (千円)	配当の原資	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2019年12月24日 定時株主総会	普通株式	57,098	利益剰余金	25	2019年9月30日	2019年12月25日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1. 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
現金及び預金勘定	2,717,959千円	3,330,102千円
現金及び現金同等物	2,717,959	3,330,102

2. 重要な非資金取引の内容

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
ファイナンス・リース取引に係る資産及び債務の額	—千円	122,470千円

(リース取引関係)

(借主側)

ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

① リース資産の内容

(ア) 有形固定資産

主としてホストコンピュータ及びコンピュータ端末機器であります。

(イ) 無形固定資産

主としてEDPの基幹システムであります。

② リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループの事業は、資金回収が比較的長期に及ぶバルブ製品の製造と、数ヶ月の短期で資金回収に至るメンテナンスにより構成されており、これらの事業計画に照らし適切な資金需要を想定し、資金運用並びに資金調達を行っております。

資金運用は、一時的に発生する余資について、投資対象を安定性と流動性の高い金融商品に限定して運用しており、期間が長期に亘る運用は行いません。また、デリバティブ取引は、外貨建ての営業債権について、為替の変動リスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行いません。

運転資金の調達は銀行からの借入金によっており、将来の業績動向に基づく資金計画を踏まえ、借入先、借入条件等にバリエーションを持たせることで、時々の状況に応じた柔軟な対応ができるようにしております。また、長期借入金による資金調達の際には、金利変動によるリスクをヘッジするために金利スワップ取引を行うことがあり、取引に際しては、社内規程に沿った適切な決裁を経て実行することとしております。

設備資金については、長期借入金、リースにより調達することがあります。長期借入金については運転資金の場合と同様、金利スワップ取引を行うことがあります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形及び売掛金、電子記録債権は顧客の信用リスクに晒されておりますが、当社グループの製品・サービスは、その半分以上を総合商社等販売代理店経由での販売としており、商社を経由しない販売先についても、国内大手ブランド・メーカーなど、極めて信用性の高い取引先が中心であります。

また、当社グループの製品・サービスの特性上、いわゆる一見の取引先はほぼ存在せず、長期に亘る取引実績を有する顧客が大半であることから、この面からも顧客の信用リスクは極めて低いものと想定した効率的な与信管理を実施することとしております。

具体的には、新規及び取引履歴の浅い顧客を中心とした取引開始時の信用調査とその継続フォローを行うこととし、商社を介在させない輸出案件に対しては基本的に輸出信用状の入手を条件としております。また、全ての売掛金に関して、期日管理と残高管理を実施しております。

なお、外貨建ての営業債権につきましては、為替の変動リスクを回避するため、社内規程に沿って、先物為替予約を利用しております。

有価証券並びに投資有価証券は市場価格の変動リスクに晒されておりますが、取組方針のとおり、有価証券は安全性・流動性の高いMMF、コマーシャルペーパー、譲渡性預金などであり、投資有価証券は運用目的ではなく、業務上の関係を有する会社の株式を保有しております。

営業債務である支払手形及び買掛金、電子記録債務、未払法人税等は1年以内の支払い期日であります。支払手形及び買掛金、電子記録債務、短期借入金は流動性リスクに晒されておりますが、月次の営業債権回収計画の作成と、流動性を確保した余資運用で手許流動性を高めることにより流動性リスクを管理しております。

短期借入金、長期借入金とともに、運転資金への充当を目的とした銀行からの借入金で、金利は固定されており金利変動リスクはありません。

(3) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません（（注）2. 参照）。

前連結会計年度（2018年9月30日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	2,717,959	2,717,959	—
(2) 受取手形及び売掛金	3,787,474	3,787,474	—
(3) 電子記録債権	156,833	156,833	—
(4) 投資有価証券	765,642	765,642	—
資産計	7,427,909	7,427,909	—
(1) 支払手形及び買掛金	501,678	501,678	—
(2) 電子記録債務	97,057	97,057	—
(3) 未払法人税等	75,804	75,804	—
(4) リース債務 (※)	41,285	38,515	△2,769
(5) 長期借入金 (※)	96,970	95,720	△1,249
負債計	812,796	808,777	△4,019

当連結会計年度（2019年9月30日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	3,330,102	3,330,102	—
(2) 受取手形及び売掛金	3,135,150	3,135,150	—
(3) 電子記録債権	85,809	85,809	—
(4) 投資有価証券	931,442	931,442	—
資産計	7,482,503	7,482,503	—
(1) 支払手形及び買掛金	711,017	711,017	—
(2) 電子記録債務	114,958	114,958	—
(3) 未払法人税等	172,148	172,148	—
(4) リース債務 (※)	146,401	141,074	△5,326
(5) 長期借入金 (※)	282,762	281,190	△1,571
負債計	1,427,288	1,420,389	△6,898

(※) 1年内返済予定のリース債務及び長期借入金を含めております。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券に関する事項

資 産

- (1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金、(3) 電子記録債権

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

- (4) 投資有価証券

これらの時価について、株式等は取引所の価格によっており、債券等は取引所の価格又は取引金融機関等から提示された価格によっております。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照下さい。

負 債

- (1) 支払手形及び買掛金、(2) 電子記録債務、(3) 未払法人税等

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。

- (4) リース債務、(5) 長期借入金

これらの時価については、元利金の合計額を同額の新規借入又はリース取引等を行った場合に想定される利率で割り引いて算定する方法によっております。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：千円)

区分	前連結会計年度 (2018年9月30日)	当連結会計年度 (2019年9月30日)
非上場株式	2,620	2,620

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(4) 投資有価証券」には含まれておりません。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（2018年9月30日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	2,717,959	—	—	—
受取手形及び売掛金	3,787,474	—	—	—
電子記録債権	156,833	—	—	—
有価証券				
満期保有目的の債券				
(1) 国債・地方債等	—	—	—	—
(2) 社債	—	—	—	—
(3) その他	—	—	—	—
投資有価証券				
その他の有価証券のうち満期 があるもの				
(1) 債券（社債）	—	—	—	—
(2) その他	—	—	—	—
合計	6,662,267	—	—	—

当連結会計年度（2019年9月30日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	3,330,102	—	—	—
受取手形及び売掛金	3,135,150	—	—	—
電子記録債権	85,809	—	—	—
有価証券				
満期保有目的の債券				
(1) 国債・地方債等	—	—	—	—
(2) 社債	—	—	—	—
(3) その他	—	—	—	—
投資有価証券				
その他の有価証券のうち満期 があるもの				
(1) 債券（社債）	—	—	—	—
(2) その他	—	—	—	—
合計	6,551,061	—	—	—

4. 長期借入金及びリース債務の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度（2018年9月30日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	80,808	16,162	—	—	—	—
リース債務	16,479	16,479	8,326	—	—	—

当連結会計年度（2019年9月30日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
長期借入金	72,762	60,000	60,000	60,000	30,000	—
リース債務	41,274	32,682	23,919	24,147	24,377	—

(有価証券関係)

1. 満期保有目的の債券

前連結会計年度 (2018年9月30日)

該当事項はありません。

当連結会計年度 (2019年9月30日)

該当事項はありません。

2. その他有価証券

前連結会計年度 (2018年9月30日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	735,899	272,166	463,732
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	16,006	9,301	6,704
	小計	751,906	281,468	470,437
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	1,514	1,917	△402
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	12,221	13,455	△1,234
	小計	13,735	15,372	△1,636
合計		765,642	296,841	468,801

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額 2,620千円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度 (2019年9月30日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (千円)	取得原価 (千円)	差額 (千円)
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	493,703	173,734	319,969
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	13,802	9,356	4,446
	小計	507,506	183,091	324,415
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	411,396	459,483	△48,087
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	12,540	13,455	△915
	小計	423,936	472,939	△49,003
合計		931,442	656,030	275,411

(注) 非上場株式 (連結貸借対照表計上額 2,620千円) については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

3. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度において、該当事項はありません。

当連結会計年度において、有価証券について983千円（その他有価証券で時価のある株式1,011千円）減損処理を行っております。

なお、減損処理にあたっては、当該期末日の時価（時価のないものについては実質価額）が個々の銘柄別に取得原価の30%以上下落している銘柄について下記の基準によって判定しております。

- (1) 当該期末日における時価の下落率が、取得原価の30%以上かつ50%未満の範囲で下落している場合
 - ・・・当該期末日を含み今後2期以上に亘り継続した場合には減損処理を実施する。
- (2) 当該期末日における時価（時価のないものについては実質価額）の下落率が、取得原価の50%以上下落している場合
 - ・・・原則として減損処理を実施する。ただし、1年以内に時価がほぼ取得原価まで回復すると合理的な根拠をもって立証できる場合には減損処理を実施しない。

（デリバティブ取引関係）

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

通貨関連

前連結会計年度（2018年9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（2019年9月30日）

該当事項はありません。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

金利関連

前連結会計年度（2018年9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（2019年9月30日）

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社は、確定給付の制度として確定給付企業年金制度及び退職一時金制度を採用しており、確定拠出の制度として特定退職金共済制度を併用しております。国内連結子会社（トウアサービス株式会社、東亜クリエイティブ株式会社）は、確定給付の制度として退職一時金制度を採用しており、確定拠出の制度として中小企業退職金共済制度を併用しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
退職給付債務の期首残高	1,879,286千円	1,833,110千円
勤務費用	70,389	95,849
利息費用	11,484	11,365
数理計算上の差異の発生額	16,295	△17,131
退職給付の支払額	△144,345	△102,011
退職給付債務の期末残高	1,833,110	1,821,182

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
年金資産の期首残高	1,099,394千円	1,081,496千円
期待運用収益	16,490	16,222
数理計算上の差異の発生額	△4,514	△158
事業主からの拠出額	56,334	56,243
退職給付の支払額	△86,209	△59,326
年金資産の期末残高	1,081,496	1,094,477

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2018年9月30日)	当連結会計年度 (2019年9月30日)
積立型制度の退職給付債務	1,280,140千円	1,245,116千円
年金資産	△1,081,496	△1,094,477
	198,644	150,638
非積立型制度の退職給付債務	552,969	576,065
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	751,614	726,704
退職給付に係る負債	751,614	726,704
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	751,614	726,704

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
勤務費用	70,389千円	95,849千円
利息費用	11,484	11,365
期待運用収益	△16,490	△16,222
数理計算上の差異の費用処理額	35,056	10,171
確定給付制度に係る退職給付費用	100,438	101,163

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
数理計算上の差異	14,246千円	27,144千円
合計	14,246	27,144

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年9月30日)	当連結会計年度 (2019年9月30日)
未認識数理計算上の差異	46,642千円	19,498千円
合 計	46,642	19,498

(7) 年金資産に関する事項

① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年9月30日)	当連結会計年度 (2019年9月30日)
一般勘定	70%	70%
特別勘定		
国内債券	26	27
国内株式	4	3
合 計	100	100

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (2018年9月30日)	当連結会計年度 (2019年9月30日)
割引率	0.6%	0.6%
長期期待運用収益率	1.5%	1.5%
予想昇給率	2018年7月31日時点の職能ポイントと役職ポイントの合計に基づき算定した予定昇給指数を使用しております。	2019年7月31日時点の職能ポイントと役職ポイントの合計に基づき算定した予定昇給指数を使用しております。

3. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度（自 2017年10月1日 至 2018年9月30日）18,970千円、当連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）19,400千円であります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年9月30日)	当連結会計年度 (2019年9月30日)
(繰延税金資産)		
賞与引当金	99,503千円	103,793千円
受注損失引当金	98,307	138,100
貸倒引当金	3,279	3,279
P C B 処理引当金	5,446	867
退職給付に係る負債	229,843	216,263
未払事業税	6,609	9,119
長期未払金	2,886	—
投資有価証券	2,941	3,242
有形固定資産	164,339	156,444
たな卸資産	164,835	136,678
税務上の繰越欠損金 (注) 2	50,412	30,409
その他	27,536	32,329
繰延税金資産小計	855,943	830,530
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額 (注) 2	—	△30,409
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	—	△462,585
評価性引当額小計 (注) 1	△847,115	△492,995
繰延税金資産合計	8,828	337,534
(繰延税金負債)		
その他有価証券評価差額金	△140,683	△81,544
繰延税金負債合計	△140,683	△81,544
繰延税金資産 (負債) の純額	△131,854	255,989

(注) 1. 評価性引当額が、353,894千円減少しております。この減少の主な要因は、繰延税金資産の回収可能性を見直したことに
よるものものであります。

(注) 2. 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

当連結会計年度 (2019年9月30日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)	合計 (千円)
税務上の繰越欠損金 (※)	5,371	3,143	—	—	—	21,896	30,409
評価性引当額	△5,371	△3,143	—	—	—	△21,896	△30,409
繰延税金資産	—	—	—	—	—	—	—

(※) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年9月30日)	当連結会計年度 (2019年9月30日)
法定実効税率	30.8%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	3.2	2.9
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.2	△0.3
住民税均等割	2.7	2.6
評価性引当額の増減	△21.3	△59.4
在外子会社との税率の差異	△0.9	△0.8
その他	0.8	△0.0
税効果会計適用後の法人税等の負担率	15.1	△24.6

(資産除去債務関係)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、バルブ、部品等の製造販売、修理、保守などの役務提供、鋳鋼製品の製造販売及び地域除染、廃炉などを主要な事業としております。バルブ等の製造販売及び役務提供は密接に関連しているため、一体で管理し、包括的な戦略を立案し、事業を展開しております。

従いまして、当社グループは、「バルブ事業」、「製鋼事業」及び「除染事業」の3つを報告セグメントとしております。

なお、当社の製鋼製造部は、鋳鋼製品の製造販売を行っており、その内容は、当社グループ製バルブ製品用の鋳鋼部材の製造と、建設機械向け他の産業向けの鋳鋼製品の製造販売（外販品の製造販売）からなります。

報告セグメントといたしました「製鋼事業」は、このうちの外販品の製造販売について集計したもので、当社グループ製バルブ製品用の鋳鋼部材の製造につきましては、「バルブ事業」として集計しております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、連結財務諸表の作成方法と同一であります。

報告セグメントの利益又は損失は、営業利益又は営業損失の数値であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 2017年10月1日 至 2018年9月30日）

(単位：千円)

	報告セグメント				調整額 (注) 1	連結財務諸表 計上額 (注) 2
	バルブ事業	製鋼事業	除染事業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	6,674,275	854,996	575,956	8,105,228	—	8,105,228
セグメント間の内部売上高又は振替高	7,294	—	—	7,294	△7,294	—
計	6,681,569	854,996	575,956	8,112,523	△7,294	8,105,228
セグメント利益又は損失(△)	1,334,382	△209,275	43,421	1,168,528	△623,922	544,606
セグメント資産	6,735,617	548,477	232,223	7,516,318	3,259,056	10,775,374
その他の項目						
減価償却費(注) 3	227,680	39,683	44	267,407	17,266	284,673
有形固定資産及び無形固定資産の増加額 (注) 3	214,140	—	—	214,140	1,298	215,439

(注) 1. 調整額は以下のとおりであります。

(1) セグメント利益又は損失(△)の調整額△623,922千円は、セグメント間取引消去3,235千円、各報告セグメントに配分していない全社費用△627,157千円が含まれております。

全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費及び研究開発費であります。

(2) セグメント資産の調整額3,259,056千円は、報告セグメントに配分していない全社資産であります。

全社資産は、主に報告セグメントに帰属しない現金及び預金、投資有価証券等であります。

(3) 減価償却費の調整額17,266千円は、報告セグメントに配分していない全社資産に係る減価償却費であります。

(4) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額1,298千円は、報告セグメントに配分していない全社資産に係る資本的支出であります。

2. セグメント利益又は損失(△)は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

3. 減価償却費、有形固定資産及び無形固定資産の増加額には、長期前払費用とその償却費が含まれております。

当連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

（単位：千円）

	報告セグメント				調整額 (注) 1	連結財務諸表 計上額 (注) 2
	パルプ事業	製鋼事業	除染事業	計		
売上高						
外部顧客への売上高	6,694,805	1,052,679	491,574	8,239,059	—	8,239,059
セグメント間の内部売上高又は振替高	7,310	—	—	7,310	△7,310	—
計	6,702,115	1,052,679	491,574	8,246,369	△7,310	8,239,059
セグメント利益又は損失 (△)	1,540,254	△212,746	△49,005	1,278,502	△757,765	520,736
セグメント資産	6,292,920	807,433	187,005	7,287,360	4,414,910	11,702,270
その他の項目						
減価償却費 (注) 3	237,010	39,075	44	276,130	16,682	292,813
有形固定資産及び無形固定資産の増加額 (注) 3	213,208	—	—	213,208	1,546	214,755

(注) 1. 調整額は以下のとおりであります。

- (1) セグメント利益又は損失 (△) の調整額△757,765千円は、セグメント間取引消去3,627千円、各報告セグメントに配分していない全社費用△761,393千円が含まれております。
全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない一般管理費及び研究開発費であります。
 - (2) セグメント資産の調整額4,414,910千円は、報告セグメントに配分していない全社資産であります。
全社資産は、主に報告セグメントに帰属しない現金及び預金、投資有価証券等であります。
 - (3) 減価償却費の調整額16,682千円は、報告セグメントに配分していない全社資産に係る減価償却費であります。
 - (4) 有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額1,546千円は、報告セグメントに配分していない全社資産に係る資本的支出であります。
2. セグメント利益又は損失 (△) は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。
3. 減価償却費、有形固定資産及び無形固定資産の増加額には、長期前払費用とその償却費が含まれております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2017年10月1日 至 2018年9月30日）

1. 製品及びサービスごとの情報

（単位：千円）

	パルプ（新製弁）	パルプ用取替補修 部品	原子力発電所定期 検査工事	その他メンテナン ス等の役務提供	その他	合計
外部顧客への売上高	2,560,152	855,257	1,332,474	1,933,685	1,423,658	8,105,228

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

（単位：千円）

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
三菱商事株式会社	1,847,257	パルプ事業
三菱商事パワーシステムズ株式会社	1,563,370	パルプ事業
西華産業株式会社	1,201,983	パルプ事業

当連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

1. 製品及びサービスごとの情報

(単位：千円)

	バルブ（新製弁）	バルブ用取替補修部品	原子力発電所定期検査工事	その他メンテナンス等の役務提供	その他	合計
外部顧客への売上高	2,907,264	1,020,975	894,506	1,879,369	1,536,943	8,239,059

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：千円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
三菱商事パワーシステムズ株式会社	2,774,909	バルブ事業
三菱商事株式会社	1,177,111	バルブ事業

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年10月1日 至 2018年9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年10月1日 至 2018年9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年10月1日 至 2018年9月30日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

前連結会計年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)		当連結会計年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)	
1株当たり純資産額	3,415円83銭	1株当たり純資産額	3,631円05銭
1株当たり当期純利益	211円24銭	1株当たり当期純利益	313円27銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないため記載しておりません。		潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないため記載しておりません。	
1株当たり当期純利益の算定上の基礎		1株当たり当期純利益の算定上の基礎	
連結損益計算書上の親会社株主に帰属する当期純利益	480,040千円	連結損益計算書上の親会社株主に帰属する当期純利益	714,372千円
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益	480,040千円	普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益	714,372千円
普通株式の期中平均株式数	2,272,458株	普通株式の期中平均株式数	2,280,343株

(重要な後発事象)

当社は、2019年9月17日開催の取締役会決議に基づき、以下のとおり子会社を設立いたしました。

(1) 設立の理由

当社グループは、原子力発電所の廃止措置に伴う建設工事並びに排出されるクリアランス金属について、当社グループのこれまでに培ってまいりましたノウハウを活かし、クリアランス金属のリサイクルを主としたリファインメタル事業（鋳鋼バルブの部品製造・インゴット製造・保管事業等）を行う目的として設立するものであります。

(2) 設立子会社の概要

- ①名称：TVEリファインメタル株式会社
- ②所在地：福井県大飯郡おおい町本郷119字西里ケ前2番地4
- ③資本金：49,000千円
- ④株主構成：東亜バルブエンジニアリング株式会社 1,959株（当社の出資比率 99.9%）
トウアサービス株式会社 1株（同 0.1%）
- ⑤設立時期：2019年10月1日
- ⑥代表者：三宅 利幸
- ⑦主な事業：各種鋳鋼製品の製造販売、とび土工・解体業、管工事・機械器具設置業、金属くず商、人材派遣業、原子力発電所の廃止措置にかかる研究支援等
- ⑧事業開始日：2019年10月1日

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期末残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	—	—	—	—
1年以内に返済予定の長期借入金	80,808	72,762	0.63	—
1年以内に返済予定のリース債務	16,479	41,274	—	—
長期借入金（1年以内に返済予定のものを除く。）	16,162	210,000	0.60	2020年～2024年
リース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）	24,805	105,126	—	2020年～2024年
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	138,255	429,163	—	—

(注) 1. 「平均利率」については、借入金の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3. 長期借入金及びリース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の連結決算日後5年内における1年ごとの返済予定額は以下のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
長期借入金	60,000	60,000	60,000	30,000
リース債務	32,682	23,919	24,147	24,377

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (千円)	1,503,318	3,263,781	4,777,698	8,239,059
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前四半期純損失 (△) (千円)	△38,158	△149,682	△249,186	573,449
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する四半期純損失 (△) (千円)	△37,999	△148,146	△264,152	714,372
1株当たり当期純利益又は1株当たり四半期純損失 (△) (円)	△16.71	△65.06	△115.89	313.27

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益又は1株当たり四半期純損失 (△) (円)	△16.71	△48.33	△50.90	428.44

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年9月30日)	当事業年度 (2019年9月30日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	2,349,867	3,026,644
受取手形	※3 377,160	271,870
電子記録債権	156,833	85,809
売掛金	※1 3,305,353	※1 2,757,303
商品及び製品	54,204	175,091
仕掛品	987,934	1,462,810
原材料及び貯蔵品	615,255	556,153
その他	※1 142,492	※1 157,812
貸倒引当金	△69,955	△76,836
流動資産合計	7,919,145	8,416,658
固定資産		
有形固定資産		
建物	※2 446,317	※2 468,900
構築物	※2 12,557	※2 11,068
機械及び装置	※2 542,866	※2 457,607
車両運搬具	※2 627	※2 313
工具、器具及び備品	※2 44,206	※2 48,133
土地	※2 261,363	※2 261,363
リース資産	14,059	74,027
建設仮勘定	7,456	29,208
有形固定資産合計	1,329,454	1,350,623
無形固定資産		
特許実施権	3,630	2,790
ソフトウェア	211,461	188,556
リース資産	24,167	68,395
その他	8,966	9,105
無形固定資産合計	248,226	268,847
投資その他の資産		
投資有価証券	768,262	934,062
関係会社株式	49,022	119,256
出資金	3,096	3,096
長期貸付金	※1 8,334	※1 4,334
繰延税金資産	—	250,887
その他	57,615	65,058
貸倒引当金	△10,724	△10,724
投資その他の資産合計	875,607	1,365,972
固定資産合計	2,453,288	2,985,443
資産合計	10,372,433	11,402,102

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年9月30日)	当事業年度 (2019年9月30日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	263,344	359,226
電子記録債務	97,057	114,958
買掛金	241,900	325,460
1年内返済予定の長期借入金	80,808	※2 72,762
リース債務	16,479	41,274
未払金	※1 137,171	※1 191,558
未払費用	110,398	111,912
未払法人税等	69,735	171,754
賞与引当金	298,020	314,019
役員賞与引当金	43,438	39,799
受注損失引当金	321,477	451,605
その他	147,417	73,614
流動負債合計	1,827,248	2,267,947
固定負債		
長期借入金	16,162	※2 210,000
リース債務	24,805	105,126
退職給付引当金	704,971	707,206
P C B 処理引当金	17,812	2,838
繰延税金負債	140,683	—
その他	79,097	9,145
固定負債合計	983,531	1,034,317
負債合計	2,810,780	3,302,264
純資産の部		
株主資本		
資本金	1,739,559	1,739,559
資本剰余金		
資本準備金	772,059	772,059
その他資本剰余金		
資本金及び資本準備金減少差益	2,486,191	2,486,191
自己株式処分差益	161	161
自己株式処分差損	△1,864	△7,160
資本剰余金合計	3,256,548	3,251,252
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	2,908,669	3,570,824
利益剰余金合計	2,908,669	3,570,824
自己株式	△671,241	△655,665
株主資本合計	7,233,535	7,905,970
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	328,117	193,867
評価・換算差額等合計	328,117	193,867
純資産合計	7,561,653	8,099,837
負債純資産合計	10,372,433	11,402,102

②【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当事業年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
売上高	※1 7,391,406	※1 7,640,569
売上原価	※1 5,605,172	※1 5,629,784
売上総利益	1,786,233	2,010,784
販売費及び一般管理費	※1, ※2 1,330,067	※1, ※2 1,469,828
営業利益	456,166	540,956
営業外収益		
受取利息	※1 742	※1 333
有価証券利息	229	37
受取配当金	21,471	27,546
受取家賃	※1 8,625	※1 9,203
受取保険金	288	15,495
作業くず売却益	6,871	8,447
貸倒引当金戻入額	19,537	—
雑収入	※1 7,258	※1 9,235
営業外収益合計	65,024	70,298
営業外費用		
支払利息	1,708	1,580
支払手数料	1,500	1,000
貸倒引当金繰入額	—	6,880
雑損失	1,046	1,262
営業外費用合計	4,255	10,723
経常利益	516,936	600,531
特別利益		
固定資産売却益	※3 263	※3 39
特別利益合計	263	39
特別損失		
固定資産処分損	※4 1,809	※4 2,374
投資有価証券評価損	—	983
特別損失合計	1,809	3,358
税引前当期純利益	515,390	597,213
法人税、住民税及び事業税	70,972	187,739
法人税等調整額	—	△332,432
法人税等合計	70,972	△144,693
当期純利益	444,418	741,906

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年10月1日 至 2018年9月30日）

（単位：千円）

	株主資本										
	資本金	資本剰余金					利益剰余金			自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金			資本剰余金合計	その他利益剰余金	利益剰余金合計			
			資本金及び資本準備金減少差益	自己株式処分差益	自己株式処分差損				繰越利益剰余金		
当期首残高	1,739,559	772,059	2,486,191	161	—	3,258,412	2,532,382	2,532,382	△683,284	6,847,070	
当期変動額											
剰余金の配当							△68,131	△68,131		△68,131	
当期純利益							444,418	444,418		444,418	
自己株式の取得									△349	△349	
自己株式の処分					△1,864	△1,864			12,391	10,527	
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）											
当期変動額合計	—	—	—	—	△1,864	△1,864	376,286	376,286	12,042	386,465	
当期末残高	1,739,559	772,059	2,486,191	161	△1,864	3,256,548	2,908,669	2,908,669	△671,241	7,233,535	

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	300,175	300,175	7,147,246
当期変動額			
剰余金の配当			△68,131
当期純利益			444,418
自己株式の取得			△349
自己株式の処分			10,527
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	27,942	27,942	27,942
当期変動額合計	27,942	27,942	414,407
当期末残高	328,117	328,117	7,561,653

当事業年度（自 2018年10月1日 至 2019年9月30日）

（単位：千円）

	株主資本										
	資本金	資本剰余金					利益剰余金			自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金			資本剰余金合計	その他利益剰余金	利益剰余金合計			
			資本金及び資本準備金減少差益	自己株式処分差益	自己株式処分差損		繰越利益剰余金				
当期首残高	1,739,559	772,059	2,486,191	161	△1,864	3,256,548	2,908,669	2,908,669	△671,241	7,233,535	
当期変動額											
剰余金の配当							△79,751	△79,751		△79,751	
当期純利益							741,906	741,906		741,906	
自己株式の取得									△246	△246	
自己株式の処分					△5,296	△5,296			15,822	10,526	
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）											
当期変動額合計	—	—	—	—	△5,296	△5,296	662,154	662,154	15,576	672,434	
当期末残高	1,739,559	772,059	2,486,191	161	△7,160	3,251,252	3,570,824	3,570,824	△655,665	7,905,970	

	評価・換算差額等		純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	328,117	328,117	7,561,653
当期変動額			
剰余金の配当			△79,751
当期純利益			741,906
自己株式の取得			△246
自己株式の処分			10,526
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△134,250	△134,250	△134,250
当期変動額合計	△134,250	△134,250	538,184
当期末残高	193,867	193,867	8,099,837

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 満期保有目的の債券

償却原価法（定額法）

(2) 子会社株式

移動平均法による原価法

(3) その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

時価のないもの

移動平均法による原価法

2. デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法

3. たな卸資産の評価基準及び評価方法

(1) 製品及び仕掛品

主として個別法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下による簿価切り下げの方法により算定）

(2) 原材料及び貯蔵品

主として移動平均法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下による簿価切り下げの方法により算定）

4. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

定率法によっております。

ただし、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法によっております。

なお、主な資産の耐用年数は以下のとおりであります。

建物 28年～45年

機械及び装置 4年～12年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっております。

ソフトウェア（自社利用分）については、社内における利用可能期間（5年）に基づいております。

(3) リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(4) 長期前払費用

定額法によっております。

5. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権等の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権及び破産更生債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与及び取締役でない執行役員の賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき当事業年度負担額を計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えるため、支給見込額に基づき当事業年度負担額を計上しております。

(4) 受注損失引当金

受注案件に係る将来の損失に備えるため、当事業年度末において将来の損失が見込まれ、かつ、当該損失額を合理的に見積可能なものについては、損失見積額を引当計上しております。

(5) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため当事業年度末における退職給付債務見込額及び年金資産残高に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を計上しております。なお、退職給付の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生翌事業年度から費用処理することとしております。

(6) PCB処理引当金

PCB（ポリ塩化ビフェニル）廃棄物の処理費用の支出に備えるため、処理費用及び収集運搬費用の見積額を計上しております。

6. ヘッジ会計の方法

原則として繰延ヘッジ処理によっております。

7. その他財務諸表作成のための重要な事項

(1) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税抜き方式によっております。

(2) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日)を当事業年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。なお、前事業年度においては繰延税金資産を計上しておりません。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第4項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(1)(評価性引当額の合計額を除く。)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前事業年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

(損益計算書)

前事業年度において、「営業外収益」の「雑収入」に含めていた「受取保険金」は、金額的重要性が増したため、当事業年度より、独立掲記することとしました。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において、「営業外収益」の「雑収入」に表示していた7,547千円は、「受取保険金」288千円、「雑収入」7,258千円として組み替えております。

(貸借対照表関係)

※1. 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

	前事業年度 (2018年9月30日)	当事業年度 (2019年9月30日)
短期金銭債権	93,854千円	98,669千円
短期金銭債務	15,900	13,909
長期金銭債権	8,334	4,334

※2. 担保に供している資産

担保に供している資産並びに担保付債務は次のとおりであります。

[担保提供資産]

	前事業年度 (2018年9月30日)		当事業年度 (2019年9月30日)	
建物	209,592千円	(157,181千円)	221,398千円	(172,479千円)
構築物	5,656	(5,656)	4,930	(4,930)
機械及び装置	307,977	(307,977)	261,517	(261,517)
車両運搬具	0	(0)	0	(0)
工具、器具及び備品	0	(0)	0	(0)
土地	201,694	(3,702)	201,694	(3,702)
計	724,921	(474,517)	689,541	(442,629)

[対応債務]

	前事業年度 (2018年9月30日)		当事業年度 (2019年9月30日)	
1年内返済予定の長期借入金	－千円	(ー千円)	60,000千円	(60,000千円)
長期借入金	－	(ー)	210,000	(210,000)
計	－	(ー)	270,000	(270,000)

上記のうち、()内書は工場財団抵当並びに当該債務を示しております。

※3. 期末日満期手形

期末日満期手形の会計処理については、満期日に決済が行われたものとして処理しております。期末日満期手形の金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年9月30日)	当事業年度 (2019年9月30日)
受取手形	12,763千円	－千円

4. 当社は、運転資金の効率的な調達を行うため主要取引金融機関と特定融資枠契約及びコミットメントライン契約を締結しております。これら契約に基づく特定融資枠契約及びコミットメントラインの総額に係る借入未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2018年9月30日)	当事業年度 (2019年9月30日)
特定融資枠契約及びコミットメントラインの総額	1,100,000千円	1,100,000千円
借入未実行残高	－	－
差引額	1,100,000	1,100,000

(損益計算書関係)

※1. 関係会社との取引高は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当事業年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
営業取引高	285,045千円	274,321千円
営業取引以外の取引高	6,884	13,834

※2. 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度53%、当事業年度48%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度47%、当事業年度52%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当事業年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
販売手数料	181,031千円	182,807千円
給料及び手当	402,066	382,683
賞与引当金繰入額	64,139	68,116
役員賞与引当金繰入額	43,438	39,799
貸倒引当金繰入額	920	－
退職給付費用	25,714	25,524
減価償却費	28,741	31,752

※3. 固定資産売却益の内容は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当事業年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
機械及び装置	225千円	39千円
工具、器具及び備品	37	－
計	263	39

※4. 固定資産処分損の内容は、次のとおりであります。

(有形固定資産の除却によるもの)

	前事業年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当事業年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
建物	175千円	78千円
機械及び装置	694	274
工具、器具及び備品	5	563
撤去費用	933	1,195
計	1,809	2,111

(無形固定資産の除却によるもの)

	前事業年度 (自 2017年10月1日 至 2018年9月30日)	当事業年度 (自 2018年10月1日 至 2019年9月30日)
ソフトウェア	一千円	262千円

(有価証券関係)

子会社株式（前事業年度の貸借対照表計上額 49,022千円、当事業年度の貸借対照表計上額 119,256千円）は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年9月30日)	当事業年度 (2019年9月30日)
(繰延税金資産)		
賞与引当金	91,134千円	96,027千円
受注損失引当金	98,307	138,100
貸倒引当金	24,672	26,776
退職給付引当金	215,580	216,263
P C B 処理引当金	5,446	867
未払事業税	6,369	9,119
長期未払金	2,886	—
投資有価証券	2,941	3,242
関係会社株式	50,238	50,238
有形固定資産	153,470	147,405
たな卸資産	164,829	136,589
税務上の繰越欠損金	35,527	—
その他	27,781	31,068
繰延税金資産小計	879,187	855,700
評価性引当額	△879,187	△523,267
繰延税金資産合計	—	332,432
(繰延税金負債)		
その他有価証券評価差額金	△140,683	△81,544
繰延税金負債合計	△140,683	△81,544
繰延税金資産（負債）の純額	△140,683	250,887

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年9月30日)	当事業年度 (2019年9月30日)
法定実効税率	30.8%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	3.2	2.6
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△0.2	△0.3
住民税均等割	2.9	2.4
評価性引当額の増減	△24.3	△59.5
その他	1.4	0.1
税効果会計適用後の法人税等の負担率	13.8	△24.2

(重要な後発事象)

「1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項 (重要な後発事象)」に記載しているため、注記を省略しております。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：千円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形 固定資産	建物	446,317	60,057	78	37,396	468,900	1,747,497
	構築物	12,557	—	—	1,488	11,068	348,781
	機械及び装置	542,866	49,498	274	134,482	457,607	4,319,787
	車両運搬具	627	—	—	313	313	40,785
	工具、器具及び備品	44,206	44,786	563	40,295	48,133	951,437
	土地	261,363	—	—	—	261,363	—
	リース資産	14,059	67,695	—	7,727	74,027	25,077
	建設仮勘定	7,456	176,094	154,342	—	29,208	—
	計	1,329,454	398,131	155,258	221,705	1,350,623	7,433,366
無形 固定資産	特許実施権	3,630	—	—	840	2,790	—
	ソフトウェア	211,461	38,521	262	61,163	188,556	—
	リース資産	24,167	54,775	—	10,548	68,395	—
	その他	8,966	38,660	38,521	—	9,105	—
	計	248,226	131,957	38,784	72,552	268,847	—

注) 表示方法は、帳簿価額による記載方式により作成しております。

【引当金明細表】

(単位：千円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	80,680	6,880	—	87,561
賞与引当金	298,020	314,019	298,020	314,019
役員賞与引当金	43,438	39,799	43,438	39,799
受注損失引当金	321,477	451,605	321,477	451,605
P C B 処理引当金	17,812	—	14,974	2,838

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	10月1日から9月30日まで
定時株主総会	12月中
基準日	9月30日
剰余金の配当の基準日	3月31日 9月30日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・買増し 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取・買増手数料	(特別口座) 大阪市中央区伏見町三丁目6番3号 三菱UFJ信託銀行株式会社 大阪証券代行部 (特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部 無料
公告掲載方法	電子公告により行う。ただし、電子公告によることができない事故その他やむをえない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL https://www.toavalve.co.jp
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、会社法第166条第1項の規定による請求をする権利、株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利並びに単元未満株式の売渡請求をする権利以外の権利を有しておりません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社には、親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第19期）（自 2017年10月1日 至 2018年9月30日）2018年12月21日近畿財務局長に提出

(2) 有価証券報告書の訂正報告書及び確認書

2019年2月1日近畿財務局長に提出

事業年度（第19期）（自 2017年10月1日 至 2018年9月30日）の有価証券報告書に係る訂正報告書及びその確認書であります。

(3) 内部統制報告書及びその添付書類

2018年12月21日近畿財務局長に提出

(4) 四半期報告書及び確認書

（第20期第1四半期）（自 2018年10月1日 至 2018年12月31日）2019年2月13日近畿財務局長に提出

（第20期第2四半期）（自 2019年1月1日 至 2019年3月31日）2019年5月14日近畿財務局長に提出

（第20期第3四半期）（自 2019年4月1日 至 2019年6月30日）2019年8月9日近畿財務局長に提出

(5) 臨時報告書

2018年12月26日近畿財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）の規定に基づく臨時報告書であります。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年12月18日

東亜バルブエンジニアリング株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	和田 朝喜	印
--------------------	-------	-------	---

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	西方 実	印
--------------------	-------	------	---

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている東亜バルブエンジニアリング株式会社の2018年10月1日から2019年9月30日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、東亜バルブエンジニアリング株式会社及び連結子会社の2019年9月30日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、東亜バルブエンジニアリング株式会社の2019年9月30日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、東亜バルブエンジニアリング株式会社が2019年9月30日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

-
- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年12月18日

東亜バルブエンジニアリング株式会社

取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 和田 朝喜 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 西方 実 印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている東亜バルブエンジニアリング株式会社の2018年10月1日から2019年9月30日までの第20期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、東亜バルブエンジニアリング株式会社の2019年9月30日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	2019年12月24日
【会社名】	東亜バルブエンジニアリング株式会社
【英訳名】	Toa Valve Engineering Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役 笹野 幸明
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	兵庫県尼崎市西立花町五丁目12番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

代表取締役 笹野 幸明は、当社の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の改訂について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、当社の財務報告における記載内容の適正性を担保し、その信頼性を確保しております。

なお、財務報告に係る内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することにより、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2019年9月30日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しております。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（以下、全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定いたしました。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、会社及び連結子会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定いたしました。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、会社及び連結子会社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定いたしました。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の前連結会計年度の売上高（連結会社間取引消去後）の金額が高い拠点から合算していき、前連結会計年度の連結売上高全体の概ね3分の2に達している事業拠点を「重要な事業拠点」といたしました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金、仕入高、買掛金及び棚卸資産に至る業務プロセス評価の対象といたしました。さらに、個々に追加すべき評価の対象として重要な虚偽記載の発生の可能性が高く、見積もりや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業等に係る業務プロセスについても検討の対象としてきました。業務プロセスの評価に当たっては、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を内部監査による独立的評価を行うことによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

3 【評価結果に関する事項】

上記評価の結果、2019年9月30日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4 【付記事項】

付記すべき事項はありません。

5 【特記事項】

特記すべき事項はありません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の2第1項
【提出先】	近畿財務局長
【提出日】	2019年12月24日
【会社名】	東亜バルブエンジニアリング株式会社
【英訳名】	Toa Valve Engineering Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役 笹野 幸明
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	兵庫県尼崎市西立花町五丁目12番1号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社代表取締役 笹野 幸明は、当社の第20期（自2018年10月1日 至2019年9月30日）の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認しました。

2 【特記事項】

特記すべき事項はありません。